

KYOBUN
COMMUNITY
DANCE
ARCHIVES

2009-2019

Kyobun

Community
Dance
Archives

札幌市教育文化会館
コミュニティダンス事業アーカイブ

SAPPORO EDUCATION AND CULTURE HALL



はじめに

教文コミュニティダンス事業は2009年より始まり、昨年度(2018年度)で10年目を迎えました。始まりはアメリカのコミュニティダンス・カンパニーである「リズ・ラーマン・エクスチェンジ」と札幌で集められたメンバーによる公演で、公演終了後も活動を継続したいという札幌の公演参加メンバーによる強い熱意によって、この事業が生まれました。その後は手探りながらも数々のワークショップやシンポジウムなどいろいろな企画を重ね、2016-2017年度ではついに小ホールで単独のダンス公演を行うまでに成長しました。こうして生まれたコミュニティダンス事業ですが、これからの10年、20年を見据え、これまでの10年間を振り返り、さらなる発展と成長を目指していくことを胸に、本アーカイブ制作に至りました。

もしかすると、「コミュニティダンス」と聞いてピンと来ない方も多かもしれません。コミュニティダンスとは「経験、年齢、職業などの違いを越え、誰もが参加・体験できるダンス」と言われております。ダンス経験の有無によらず、世代をも越えて一体となることができるコミュニティダンスには、たくさんの可能性が秘められていると感じています。

私たちがこれまでおよそ10年に渡って続けてきたコミュニティダンス事業。なぜ続け、これからどこに向かっていくのか。このアーカイブを通じて、その一端を少しでも感じて頂けることをスタッフ一同、願っております。

それでは、教文が築いてきたコミュニティダンスの世界を少しだけ覗いてみましょう。

札幌市教育文化会館



教文コミュニティダンス事業

10年間のあゆみ

リズ・ラーマン・ダンスエクスチェンジ合同ダンス公演をきっかけに教文コミュニティダンス部が結成され、手探りで始まったコミュニティダンス事業。地域コミュニティとダンスをどう結ぶか、模索し続けた10年間の試みを振り返ります。

[2009年3月19日]

リズ・ラーマン ダンスエクスチェンジ 合同ダンス公演

年齢、障がいの有無に関係なく、いろいろな力を引き出された参加者の語り、話す仕草や手振り身振りから生まれたダンスによって、詩的な世界が展開。参加者からは「WSを通じて思いやりと挑戦することを感じた」といった声が寄せられた。



[2012年1月15日]

教文コミュニティダンス部 発表公演 踊りに行くぜ!! II vol.2

プロのダンサーに交じってのコミュニティダンス部による初のダンス作品発表は、ダンス部のファシリテーターたちのモチベーションを上げる機会につながった。生演奏(ピアノ、打楽器、ディジュリドゥ)映像など盛りだくさんの作品は、好評を得た。



[2015年2月25日・26日]

ダンスシンポジウム ダンス系電話

世界的に活躍する「山海塾」の事例紹介、グループホームみのりの活動紹介、砂連尾理さんによるWSと事例紹介、ディスカッション等、コミュニティにおけるダンスの役割について話し合った。

[2015年10月～12月]

教文ダンスワークショップ・フェスタ

国内外で活躍する札幌、小樽のダンサーを講師に迎え、子どもから高齢者まで参加できるダンスワークショップを開催。

[2017年2月18日]

ダンスワークショップ&発表公演 The home dance

ザ・ホーム・ダンス/ワーク・イン・プログレス

“家の中の動き”をテーマに顔を洗う、歯を磨くなど日常の仕草をダンス化。元になっているのは何の動きだろう?と考える楽しさも。帰宅後、顔を洗うときにふとダンスを意識してしまうような、観客にとっての日常もダンスに変わりそうな余韻を残す作品となった。



2009 2010 2011 2012 2013 2014 2015 2016 2017 2018 2019

[2010年6月26日・27日]

ダンスシンポジウム ダンスの持つ力

1日目はコミュニティダンス体験WSとシンポジウム、2日目はファシリテーターのためのWSとミーティングを実施し、札幌でどのように活動を広げていけるかについて話し合った。

[2011年3月21日]

ダンスワークショップ&発表公演 ふれる・むすぶ・つながる

「ダンスを通してつながるコミュニティの新しい形」と題して、毎月1回ずつ開催していたワークショップの成果を発表した。参加者は一か月前、一般に公募した市民であり、ダンス部のファシリテーターが振付を担当した。

[2013年2月16日・17日]

ダンスシンポジウム ダンスコミュニケーションの拡張 ~地域のコミュニティをむすぶ試み

新舗美佳さんによるダンスデュオ「ほうほう堂」の活動紹介とダンスWS、教文コミュニティダンス部による成果発表、函館と世田谷区のダンスによるコミュニティ活性化事例紹介、ディスカッションを行なった。

[2014年3月20日・21日]

ダンスシンポジウム ダンスとライフの間

コミュニティにおける演劇・ダンスの役割について考察する事例紹介、砂連尾理さんによるWS、教文コミュニティダンス部による成果発表、京都芸術センターによるダンスコミュニティづくりの取組紹介、ディスカッションを行なった。

[2016年3月27日]

ダンスシンポジウム ダンスの壺

櫻井ヒロさんによるアウトリーチの事例紹介、パフォーマンスの海外における事例紹介、砂連尾理さんによるWSのほか、2013年以降のシンポジウムを振り返り、社会とダンスについてディスカッションを行なった。



[2018年2月25日]

ダンスワークショップ&発表公演 しっぽまいろー

「OLYMPIC」を逆に読んで「しっぽまいろー」というタイトル同様、絶対にゴールしない短距離走や逆向きメドレーリレーなど、動きも逆さまに。ドラム、ピアノ、トランペットの即興的な演奏とともに、へんてこで不思議な世界が出現した。

[2019年3月3日]

ダンスワークショップ&発表公演 Populus (ポプラス)

北海道の代表的な木でもあるポプラの語源はラテン語「Populus(人々)」。人々が木の下に集まり集会したことに由来した本作品では、「森」をテーマに、様々な表現が誕生。ショーイングには、札幌市内で活動するダンス団体をゲストに招き、彩り豊かなひとときが誕生した。

コミュニティダンスのルーツ イギリスの場合。

年齢や性別、国籍などを超え、誰もが参加し、創造することができるコミュニティダンス。これは「ダンス・フォー・オール」(みんなのためのダンス)を提唱しているイギリスが中心となって広がっていきました。コミュニティダンスの起源は1960年代、カウンターカルチャー※から始まり、広く普及し始めたのは1990年代からと言われておりますが、当時のイギリスでは、貧富の差が広がり、医療・教育の荒廃、失業者の増加など様々な問題を抱えておりました。そこで、イギリス政府は「コミュニティの再生」などを重要視した政

策を打ち出すと、その政策の内容とコミュニティダンスの持つ特性が見事に合致します。これによって、コミュニティダンスに特化した組織がつくられ、助成金などの制度が整えられていきました。コミュニティダンスは徐々に教育や医療にも取り入れられるようになり、例えば、うつ病や肥満の患者に対して、医師が処方箋を出す代わりにダンスのクラスを勧めるといった事例もあったとされています。このようにダンスの枠組を超える拡がりをもつコミュニティダンスに可能性が見いだされ、日本にも導入されていきました。

※)カウンターカルチャー: 主流の文化に対抗する文化のこと。1960年代イギリスのカウンターの代表としてビートルズなどのロック音楽が挙げられる。

Q & A

Q1 コミュニティダンスって何?

A1

ひとことで言うと、全員参加型のダンス。技術力や経験を問われるようなダンスとは異なり、年齢や性別、職業などあらゆる壁を越えながらも楽しめるのがコミュニティダンスです。



Kyobun Community Dance Archives

教文コミュニティダンス
[2018年度]

事業報告

コミュニティダンスWS [2018年度]

Populus (ポプルス)

- 一般WS (I期) 6日間 / 2018年9月13日～9月23日
- 一般WS (II期) 6日間 / 2019年2月20日～3月1日
- 合同ショーイング / 2019年3月3日

親子グループWS

ゆるぎゅっぼん

- 2019年2月20日・24日

コミュニティダンスWS [2018年度]

Populus (ポプラス)

✦ 一般WS (I期) 6日間 / 2018年9月13日～9月23日

✦ 一般WS (II期) 6日間 / 2019年2月20日～3月1日

✦ 合同ショーイング / 2019年3月3日

10年目の教文ダンスワークショップでは、「森」をテーマとしたダンスの創作に挑戦。ショーイングの後は大澤寅雄さんを進行役に迎え、合同ショーイングに出演した「Borderless」と「昭和レディ」のメンバーの声も交えながら、各作品について意見交換を行いました。

大澤 最初に、教文ダンスワークショップ (WS) のショーイングをご覧になったお客さんから感想を聞いてみますか。WSに参加した人以外の方で、どなたか手を挙げていただけますか？

来場者 自然で無理のない動きに、その人の感情を見たように思います。ただ、振りはあるままでいいと思いますが、あまりに有名でイメージのついた曲を使用していたので、自分だったら曲は違うものを使ったなと思いました。

来場者 とても躍動的なイメージがありました。小さいお子さんも溶け込んでいて、彼が主役のように感じながら見ていました。

来場者 正直に言うと、せっかく森のイメージとして用意されている木の小道具を、使いきれなかったような印象がありました。でも全体的に非常に面白かったと思います。

来場者 舞台上の人たちのプロセスや気持ちが伝わってきて、素晴らしかったです。

大澤 こういう場所で正直な感想というか批評的な視点も出てきていることや、過去のWS経験者が自分たちの頃と変わっていないプロセスの良さをきちんとわかってきていて、とても良いフィードバックだったと思います。今年のWSでは、どんなことをしたのでしょか？

櫻井 今年は僕と千晶さんが共同振付という形で関わって、自分たちが札幌でどんな風にコミュニティダンスをつくることのできるのか、発展させていけるのかを考えました。僕自身白老にある飛生の森でWSをする機会があったり、木こりの友達から森について話を聞いたりする中で、「森と人間の身体はリンクしているところがあるのではないか」「これからの

森を考えると、これからの人間の身体を考えていくことは、遠いようで近いことなのではないかと思うようになって。地域の森について身体を通して考えてみたくて、森をテーマにした『Populus (ポプラス)』をつくりました。

大澤 森を考えると同時に、身体を考えると。今回は9月と2月に分けてWSを行っていますが、参加者の様子はどうか？

櫻井 それぞれ6日間のWSで、9月は友人の林業家に森に関するレクチャーをしてもらいました。そのあと、参加者に好きな木の葉を持ってきてもらって葉っぱの落ちる様子をダンスにしてみるとか、そういう形で創作してショーイングをしました。9月は公開発表ではなかったので、みんなと話すことに結構時間を使って。そこから2月のWSまでは半年くらい聞いていて、身体もリセットされてしまうので、2月は木に関する1分くらいのソロ作品をつくってきてもらうことにしました。

大澤 9月にある程度素材が浮かび上がったものと、2月に一人ひとりから引き出したものとで最終的に構成したんですね。参加者の雰囲気や課題、思った以上にうまくいったところはあるですか？

櫻井 参加者には3年目というベテランの方もいて、雰囲気はすごく良かったです。ただ、時間はタイトでした。コミュニティダンスは、僕らがつくって「これをやってください」というものとは違います。僕らの場合は特に「こういう風に考えているんだけど、どう？」って話し合う時間がないと、多分ダメになっちゃう。

大澤 「どう？」って聞かれても困ることがあるんじゃないかなと思うのですが、参加者の人はどうですか？



一般ワークショップの様子

参加者 私は元々ダンスをしていたわけではなく、詳しいことはわからないので、「なるべく教えてもらった通りについていかなきゃと思っていました。

大澤 WSを見学したときに思いましたが、Nさんは教えられた通りに踊っている部分もあるけれど、ご自身で考えた振りがとても面白い。それが『ポプラス』にはすごく生きています。

参加者 僕は今年2年目です。ダンスはやったことがなかったけど、今年は自主的にやれたかなと思っています。

櫻井 Kさん、いいダンサーになったよね。身体の可動域が広がって、ダンスが上手くなってびっくりした。これはコミュニティダンスをやっていて結構驚くことの一つです。年齢に関係なく、ダンスに関わり始めると、みんなダンスが上手くなっていく。

大澤 年齢とともに身体が衰えていったり、鍛えないとできなかつたりすることが、できるようになっていく。すごいことですよね。

参加者 私はWSに参加するのが初めてで、3回くらいしか出ることができなかったのですが、みんなの考えを知ることのできる「話す時間」が大事でした。背景の全然違う人が集まっているから、私が「こうだろう」と思っていたことと全然違う答えが返ってきて、予想できない。そこが私には新鮮で、面白くて、勉強になりました。

大澤 参加したことで参加者にどんな変化が起きているのか、自分自身の変化をどんな風に捉えているのか、聞いてみたいですね。

参加者 私は大学2年のときにWSに参加して、そのときは「つまらないな」と思って、それ以来関わっていませんでした。私は元々演劇の人でダンスをしたことはなかったけれど、WSはすごく安心できる環境で、羽を伸ばすことができとても楽しかった。演劇をしている人は左脳的というか理屈で考えてしまうのですが、ダンスは右脳的で解放される。そういう意味で人生が開けて、「私でいいんだ」と思えることができました。





参加者によるショーイング

(Borderless)によるワークショップ

参加者 私は初めて参加したのですが、皆さんがすごく優しくて楽しかったです。やる前よりチャレンジ精神が増えたかな。あと身体が柔らかくなったと思います。

参加者 私は普段ジャズダンスをやっていますが、カウントで確実に振りを決めるとか、舞台でもその振りを踊りこなすというタスクをこなしている感じで、振りを踊ることができないと失敗だし、その失敗をなくすための稽古を延々とする生活を送っています。でもここに来ると、三者三様で間違いがない。ダンサーだとか役者だとか主婦だとか全く関係なく、「ダンスと言えどもダンスではない。でも動作という範疇には留まらない。気持ち的に楽な場所」というのが、今の私にとってのコミュニティダンスです。ジャズダンスでは格好つけることをつい考えてしまうのですが、意外とカウントじゃなくてもいいのかもと思って、やってみたら結構いいと思う瞬間がある。そんな感じの心が豊かになる瞬間が、生活の中ですごく増えています。

参加者 私は早期退職をして専門学校で介護福祉士の勉強

をしていたときに、コミュニティダンスのことを知って。WSでお年寄りと一緒に踊るとチラシに書いていて、これは面白いかも、と。今は高齢者の方と仕事をしているのですが、ひそかにダンスしています。

大澤 メンバーからの声を聞いて、千晶さんはどう思いましたか？

河野 皆さんから「自分でいられる場所」と言ってもらえるのは嬉しいです。私自身もジャズダンスではダメ出しのダンスばかりをしていたけれど、コミュニティダンスはひたすら「いいね」を出す場だと思っています。

大澤 今回はWSメンバーの発表だけではなく、昭和レディとBorderlessにも参加してもらいました。彼らの発表について、ヒロさんから感想をお願いします。

櫻井 BorderlessはWSという形でショーイングをして、昭和レディは昭和歌謡曲に合わせた踊り、僕らのコミュニティダンスも両者と違って、すごく面白かったです。ダンスにはいろいろなものがあるけど、それぞれに多分正解はある。

そして、ジャズダンスにおける正解と、僕たちのコミュニティダンスにおける正解は違う。ジャズダンスの糸乱れぬユニゾンからもらえる人がいたとして、僕にとってはその「もれてしまう動き」が面白い。そして、その「もれてしまう動き」を、ユニゾンで踊る人たちが果たしてできるのかと思うと、「他人のできるは私のできない」みたいなことだと思う。それがコミュニティダンスの面白いところですね。

大澤 3団体とも、踊りから人となりが出てしまっている感じがあるし、どんなものが出てきても受け止めようという感じが印象的でした。砂連尾さんからも感想をお願いします。

砂連尾 皆さんお疲れ様でした。札幌のダンスの多様さは誇っていいと思います。ダンスにおいて作品をつくらないと評価されない状況がある中で、僕自身WSだって作品じゃないかと思っていたのだけど、今日WSを舞台上でやったのがすごく良かったと思いました。昭和レディはダンスの文脈で一番語りやすいですね。ダンスを自由にやりたいという人の中には、曲に合わせることを自由にやりたいという人も

と思うので、その受け皿になっている。最後の作品は、ヒロさんと千晶さんのみんなを受け入れる姿勢、どんなことであっても受け入れていくんだという姿勢が、作品からもみんなの発言からも伝わってきました。これって、意外と今の社会の中では担保されていない。残念ながらダンスでしか担保されていないのが現在の社会で、それは非常に悲しいことだけど、少なくともここにはある。コミュニティダンスが、社会のセーフティネットになっているのではないかと思います。多分千晶さんは、昭和レディのようなダンスで「もっと振りを揃えたい」というところからスタートしながら、「振りを揃えないこと」を受け入れていく。ヒロさんは、その場で行われる皆さんの仕草や表情が本当に面白かったんじゃないかな。そうやって見守る人がいて、この10年でこのような形でさまざまに広がってきていることは、とても素晴らしいことだと思います。

櫻井 昭和レディの牛島さんと、Borderlessのお二人にも話を聞いてみたいです。





過去10年間振り返り会を終えて

牛島(昭和レディ) Borderlessの発表はちょっとしか見ることができなかったのですが、客席と一体になっているのを見て、私たちが雰囲気に応じてみんなで楽しめる感じにもっとできたかなあという反省がありました。私もジャズダンスをしていましたが、今は逆にあまり好きじゃない。それぞれ身体も違えば歴史も違うので、同じになるわけがないと。コミュニティダンスの最後の作品も、それぞれが自分のやりたいことをやっているのが見えて、すごくいいなと思いました。ダンスの中で触れ合ったり、コミュニケーションをとりながらつくったりしていることが、温かくていいなと思って見ていました。

エレナ(Borderless) 昭和レディはとても楽しかったです。ヒロ君も言っていますが、札幌のコミュニティダンスの良さは、一人ひとりの中から何かを生み出して、つながること。人と人、自分と、環境と、つながる。それがとても良かったです。私たちの世界で今、木を大事にしないといけないということがすごく伝わってきて、叫びたいくらいありがたいと言いたい。

堀内(Borderless) コミュニティダンスにおいて、20分という発表時間の中で何を大事にするか。メンバーと一緒にずっとやってきたはずだけど、それぞれ大事にしていたことが違った。その違いの中で、私はコミュニティダンスをやりたいという欲望が強いので、次はどうしようかなと今考えています。

出演団体プロフィール

教文ダンスワークショップ micelle(ミセル)

2014年に櫻井ヒロと河野千晶により結成された接触と即興のダンス、コンタクト・インプロビゼーションのユニット。劇場と地域をより近く繋がったものすべく、養護学校、高齢者グループホーム等でのワークショップや公演活動を行いながら、ダンスを通して様々な特徴を持つ身体と向き合い、他者との協調や主張のできる身体性を模索している。

Borderless

Border-less means to feel free and be united, one with everybody and everything. ボーダレス=自由なこと、そしていろいろな人や物とのつながり。

昭和レディ

昭和レディ…それは、牛島有佳子率いる現在進行形で輝く昭和生まれの女性たちが集まった青春ダンス集団。観てくださったお客様に元気になってほしい!をモットーに公演を行う。



親子グループWS

ゆるぎゅっぼん

2019年2月20日[水]・24日[日]

子育て中の限られた時間でも親子が身体をつかって向き合える、あそびのような、ダンスのような、ちょっと不思議な身体のふれあいのワークショップ「ゆるぎゅっぼん」。初の試みとして0～3歳児を対象に、「親子で一緒に楽しく身体を動かす」をテーマに2日間開催しました。アコースティックギターの生演奏に合わせて、お子さんと一緒にストレッチをしながらゆったりと身体を“ゆる”め、抱っこやハグで“ぎゅっ”とつながり、最後はみんなで踊って“ぼんっ”と弾ける。身体を動かした後は、子育て世代の講師も一緒に参加者の皆さんと子育ての大変さや日々の喜びを話し合い、最後はみんなで話し合った内容をもとにした歌をつくり、輪になって踊りました。この日は参加者の方々に安心してご参加いただけるよう、授乳室やおむつ替えスペースも完備しました。



参加者の声

動けたり、少しでも(30秒でも)子どもと離れるタイミングがあって嬉しかったです。

リフレッシュできて良かったです。全部はだして移動できるのが安心でした。

身体を動かせる時間に加えて、子どもがおもちゃで遊べる時間も、眠たい時間ながらも娘が楽しく過ごしてくれて助かりました。

一緒に参加する運動も楽しかったのですが、お話していたときに子どもを見てくれたお姉ちゃんが本当に優しく、大好きになったようです。ありがとうございました。

すごく親子で楽しめた。子どもが楽しそうだった。子どもを見られるスタッフがいてくれたので良かったです。

ベビーヨガができて子どももとても楽しそうでした。自由な雰囲気よかったです。



自由を生み出すルール

ファシリテーターの役割。

岩澤 孝子(北海道教育大学)
(2010~2013年参加)

様々なバックグラウンドを持つ参加者とともにダンスをつくるコミュニティダンスには、ダンス・ワークショップを円滑に進める進行役「ファシリテーター」という役割が存在します。歴史が浅いせいか、その実践アプローチは模索の段階にあり、私は幸運にも教文コミュニティダンス部でファシリテーターを経験する機会に恵まれました。

ジャンルや型にとらわれない自由なダンスでありつつ、コミュニティづくりも追求するコミュニティダンスには独特のルールが必要だ、と

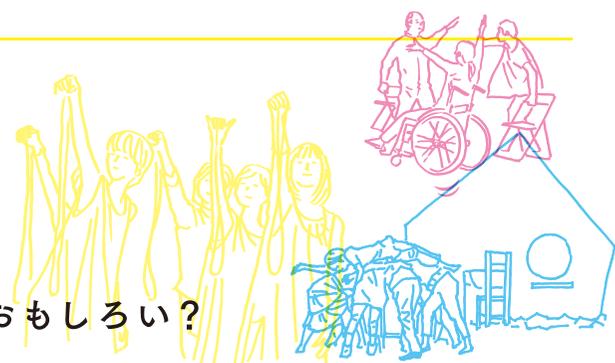
気づきました。例えば「からだで○(マル)を表現する」というルールが提示されたら、あなたは どうしますか?美しく回転したり、指で小さな○をつくったり、丸い息を吐いたり、あるいは、誰かと両手を繋ぐかもしれません。シンプルだけれどいろいろな動きを引き出してくれるアイデアは、条件が異なれば生まれる動きも感じ方も変化します。ここでのルールは共同体を型にはめて縛るものではなく、むしろそれを共有するからこそ自由が生まれる、クリエイティブなものなのです。

Q & A

Q2 つくる過程がおもしろい?

A2

コミュニティダンスは、他のダンス以上に「個性を活かすこと」に重きが置かれているダンスで、決められた振り付けや型、リズムもなければ、集まった人たちが今できるダンスを考えて作り出すことができるのがとても面白い。作る過程でアイデアが膨らみ、どんどん変化していくことで、完成形が良い意味で見えないダンス。それがコミュニティダンスの大きな魅力なのかもしれません。



TIME TRAVEL

2018 - 2009

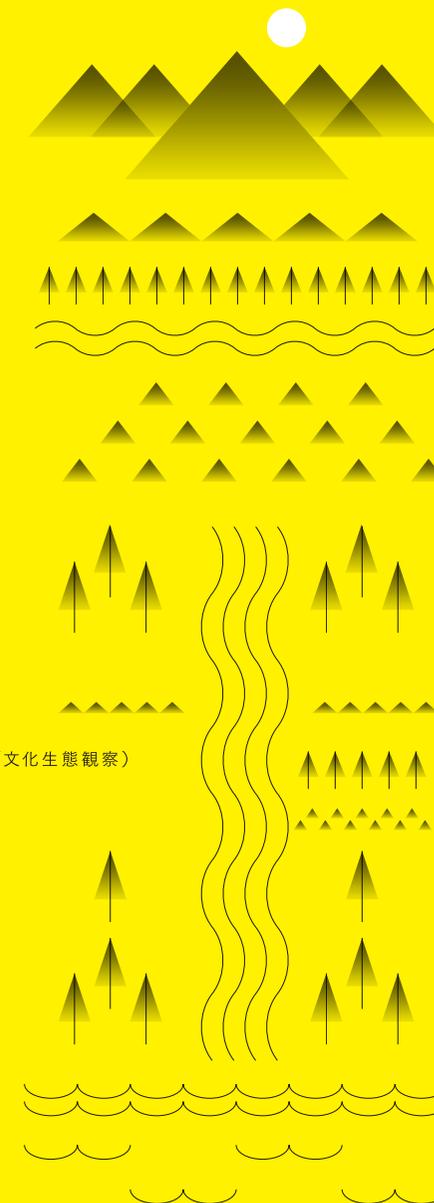
コミュニティダンスと札幌市教育文化会館の10年間

— 現在から過去へ旅をする —

2019年3月3日に札幌市教育文化会館で開催された教文コミュニティダンスワークショップショーイング「Populus -ポプラス-」。ショーイングの後には、大澤寅雄さんによる司会のもと、教文コミュニティダンス事業10年の軌跡を振り返る会が行われました。冒頭で大澤さんは、アイヌの言語学者・知里真志保さんの著書『アイヌ語のおもしろさ』より「われわれの考え方からすれば、川は山から発して海に入るものであるが、アイヌの古い考え方に従えば、それは海から上陸して山へ登って行く動物である。」という一節を紹介。この考え方に倣って、2009年を山の頂上、2018年を海と見立て、海から山へ登る動物のように年代を遡っていくことに。10年の軌跡を辿る旅は、「創造」と名付けられた2018年から2016年の時期を振り返ることからスタートしました。

- 大澤寅雄(ニッセイ基礎研究所芸術文化プロジェクト室/文化生態観察)
- 砂連尾理(振付家/ダンサー)
- 櫻井ヒロ(振付家/ダンサー)
- 河野千晶(振付家/ダンサー)
- WS参加者(過去参加者を含む)

- 1 創造 2018 → 2016
- 2 展開 2016 → 2014
- 3 派生 2013 → 2010
- 4 起点 2009 →



創造

2018 → 2016



2018.2



2017.2

砂連尾さんを中心に、 作品づくりにエネルギーをかけていた「創造の時期」

大澤 この時期は、砂連尾さんを含めて作品創造に向かってワークショップをやっていた時期です。「ダンスって何だろうと考えることが多かった」という感想が参加者からあったのが2017年度。2016年度では発表公演を見た10代の女性から「どんな気持ちで見たらいいかわからなかったが、次は何をやるのだろう？この動きは日常のどんな動きを表しているのだろう？と考えながら見るのが楽しかった」という感想がありました。主に砂連尾さんが中心になって、ワークショップを長期間やりながら作品づくりに向かっていたと思うのですが、どんなやり方で、どんな風に行っていたのですか？

砂連尾 「札幌で作品をつくるって、どういうことだろう？」という思いがあって、まずは自分たちの生活を見つめ直すところから始めました。自分の中にあるものを見つめ直して自分自身を感じ、それを他者に開いていきながら、同様に他者のことも見つめることができるものを、とってつくったのが2016年度の『The home dance ザ・ホーム・ダンス/ワーク・イン・プログレス』です。2年目は札幌のことをテーマにしたい、「札幌を踊るってどういうことだろう？」と考えて、「オリンピックに違和感がある」という話から、「新しい身振りやルールを自分たちでつくっていくとしたら、どうなるだろう？」「“高く速く速く”ではない価値観でスポーツを考えるとしたら、どんなものがあるだろう？」という僕の問いかけに回答してもらいながら『しっぽまいろー / CIPMYLO』

をつくりました。

大澤 ヒロさんと千晶さんは、砂連尾さんに伴走する形で2年間共につくって、今年はその砂連尾さんの役をやったわけですね。2年前の自分の役割とはどんな風になりましたか？

河野 これまでは砂連尾さんが主に構成して、私はそれについていく形だったので、立ち位置として参加者に割と近い感覚でいました。最初に砂連尾さんに会ったとき、ちょっと痛いところをほじくってくるというか、いじめっ子みたいだなという印象があって。私からすると「その人にとって、それはちょっと痛いのでは…」と思うところを、砂連尾さんは本当に「いいね」と言っている。言われた人はもしかしたら嫌だったかもしれないけど、「それが何かいいことになっている」という感じでした。私はそこまで参加者に対して突っ込みなかったけれど、「いいね」と言える隙を探しながらやるようにしていました。

大澤 過去に砂連尾さんのワークショップに参加された方、今の千晶さんの発言に対してどうですか？

参加者 私はそんなに刺された感じはなかったけど、ツッコミの仕方は面白いなと思って見ていました。その人の身体に無理がなく、その人の日常が出ているダンスで、それがいいんだっていうことをすごく考えてくれていたと思います。

参加者 砂連尾さんはやっぱり鋭かったと思います。自分ができないことはいっぱいあるけれど、それを許容してくれたので、頑張



○ a / b / c / d / 2018年2月25日 しっぽまいろー ○ e / f / g / h / 2016年2月18日 The home dance ○ i / j / k / 2016年度ワークショップ

りたいと思いました。

参加者 私は60歳以上でも参加できるというのを見て「自分にもできるかな」と思って参加したのですが、砂連尾さんに会って衝撃を受けました。砂連尾さんは、いろいろ話を聞きながら、その人の持っているものを引き出してくれる。本人が苦手だと思うところを無理やりさせるような人ではないです。私は高校の教員で、創作ダンスを何十年もやってきました。みんな最初は「恥ずかしい」「嫌だ」と言うけれど、やっているうちにどんどん生き生きしてきます。砂連尾さんに会ったとき、もし30年前に出会っていたら、私はまだまだ生徒に素敵な創作ダンスをさせることができたんじゃないかなと思って。後輩でダンスを教えている教員に「(コミュニティダンスのワークショップは)絶対行った方がいいよ」と伝えています。いつのまにかダンスは高校ではなく中学校の必修科目になりました。ジャズダンスやヒップホップのようなダンスを積極的にさせているみたいで、「ダンス=カッコいい踊り」になっている。本当はコミュニティダンスのようなものやってもらいたいなと思っています。

参加者・観客の声

2018年2月25日『しっぽまいろー』
即興的な動き、踊り、音、音楽…と予測不可能な競技(?)に次は何が起こるのだろうとワクワクしながら観ていた。(観客・30代女性)

2017年度ワークショップ
年齢も普段されていることもさまざまな方と出会い、ダンスって何だろうと考えることが多かった。今回はどのように踊ったらよいか手探りだったが、決められた振りや役割ではなく、私のままで舞台上「いる」ことに挑戦できたのは良かった。(参加者・40代女性)

2016年度ワークショップ
今回のワークショップではただの日常が楽しい時間になる。ダンスになる。日々の生活が少し違った風景に見えそうです。(参加者・60代女性)



展開

2016 → 2014



2016.3 2015 2015.2 2014.3

ダンスシンポジウムを中心に、 ファシリテーターとして砂連尾さんが 関わり始めた「展開の時期」

大澤 2016年から2013年にかけて振り返ると、ダンスシンポジウムでディスカッションの場を設けてワークショップもするという内容で、いろいろなダンスの実践者がお互いに情報共有したり、意見を交換し合ったりしていました。『教文ダンスワークショップ・フェスタ』という催しも2015年にありました。この時期は、地元で活動されている方がファシリテーションの技術を学んでいたのではと思います。2015年2月にはダンスシンポジウムとワークショップという内容の『ダンス糸電話』、2014年3月には同様の内容で『ダンスとライフの間』が開催されました。2013年度から2015年度ぐらいまでの期間は、ダンスシンポジウムを中心に展開されつつ、砂連尾さんが関わり始めた時期でもあったのですが、この頃に参加していた方はいらっしゃいますか？

来場者 2013年に初めて千晶さんがコミュニティダンスに関わって、ずいぶんご苦労なさっただろうなと思います。ともかく京都の舞台に参加者を立たせなければならぬ中で、「何をこの人たちはできるんだろう？」という焦燥感といいますか…。ともかく舞台の上でできることをさせなければいけないということで、大変だったと思います。

大澤 2013年に京都で開催されたコミュニティダンスのフェスティバル『Dance 4 All』に、教文コミュニティダンス部が参加したときのことでですね。

来場者 はい。京都に行ってみて「私たちは何かつくり方を間違えたな」と思いました。私たちは目に頼りすぎたというのが、参加したときの感想です。きっと同じテーマでも違うところから、例えば感じ



○ a / b / c / d / e / 2016年3月27日 ダンスシンポジウム「ダンスの壺」

○ f / g / h / 2015年 ダンスワークショップ・フェスタ ○ i / j / k / 2015年2月25、26日 ダンスシンポジウム「ダンス糸電話」

○ l / m / n / 2014年3月20、21日 ダンスシンポジウム「ダンスとライフの間(あいだ)」

る世界とか聞こえる世界からつくったら違うものになったのではないかと、京都に着いた瞬間に思いました。それで「見て帰ろう」って。

大澤 面白い話ですね。参加者がファシリテーターの心配をしていた。千晶さん、この状況は当たっていましたか？

河野 その通りです。私は『Dance 4 All』からファシリテーターとして参加したのですが、そもそもそれまでコミュニティダンスの存在も知らず、ヒロさんに「ちょっと手伝って」という感じで誘われて、それまでの自分の世界における振付をしてしまった。私も京都に着いて「ちょっと違ったな」と思ったのですが、もう遅いので、私も「見て帰ろう」と思って、『Dance 4 All』でコミュニティダンスに出会って、ある作品では見ながら号泣して。札幌に帰ってきたら世界が変わって見えるという体験をしました。でも号泣する私の横で、ヒロさんにはその作品が全然響いていなかったで、コミュニティダンスを見ている人の中でも響くものは違うんだなって思いました。

大澤 作品を見て世界が変わるという経験は僕にもあります。その経験ってすごく貴重な経験ですね。ありがとうございます。

参加者・観客の声

2014年3月20、21日
ダンスシンポジウム『ダンスとライフの間(あいだ)』

京都芸術センターのコミュニティダンスの取組等について興味深くお話を聞くことができました。前知識等が何もなく参加させて頂きましたが、人間にとって大切な何かを得られる素晴らしい事業だと思いました。ありがとうございました。
(参加者・60代)

2015年2月25日、26日
ダンスシンポジウム『ダンス糸電話』

少し意識しただけで身体がポカポカしました。すっごく面白かったです。相手に身体を預けることは苦手ですが、できるようにしたいと思います!! (参加者・20代女性)

2016年3月27日
ダンスシンポジウム『ダンスの壺』

他の人の考えが聞いて刺激になった。初めて会った人とディスカッションする機会はなかなかないので、ありがたかったです。
(参加者・10代女性)



派生

2013 → 2010

コミュニティダンスの経験がある劇場との地域間交流や、 アウトリーチ活動によって 社会とつながり始めた「派生の時期」

大澤 この辺から砂連尾さんがいなかった時期です。遡ること5、6年前。世田谷パブリックシアターや北九州芸術劇場などコミュニティダンスの経験がある劇場とネットワークを組み、シンポジウムの講師をお願いしていた時期です。教文スタッフさんのレポートの中に「各地域におけるダンス事業の個性みたいなことを感じることができた」とあります。シンポジウムで事例を紹介してもらった世田谷パブリックシアターや北九州芸術劇場の他にも、京都芸術センターが開催していた『Dance 4 All』に福岡や静岡からのコミュニティダンスのグループも参加するなど、コミュニティダンスの大きなムーブメントがありました。そういったムーブメントの中で、地域間交流みたいなことをやっていた。この辺りのことを語るができるのは、当時教文のスタッフだった桑原さんだけだと思うのですが、いかがですか？

桑原 2012年辺りは、ある意味過渡期だったと思います。これから説明される2009年のリズ・ラーマンの公演が終わった後で、どういう方向性でダンス事業を続けていけばいいのか検証していた時期です。シンポジウムの説明をしてもらったのですが、他にアウトリーチやワークショップもやっていました。その成果発表の場として、こういった形でシンポジウムをやっていました。

大澤 そう考えると、全国各地の大きな流れの中で協力をいただきながら、徐々に札幌で地盤を固めつつあった時期とも言えますね。足場を固めながらヒロさんや千晶さん、砂連尾さんが入ってくる下地ができてきていた気がします。この時期、『踊りに行くぜ!!! vol.2』の札幌公演で、教文コミュニティダンス部の発表公演がありました。『踊りに行くぜ!!!』は京都を拠点とするNPO 法人ジャパン・コンテンポラリーダンス・ネットワークが主催するダンス公演で、ダンサーたちが全国各地で作品を発表し合う企画です。ソロやユニットという形で独自の活動を行うダンサーが出演を占める中で、教育文化会館という公共ホールの事業から自発的に部活として生まれた活動が出演するというのは、非常に珍しいことでした。この『踊りに行くぜ!!!』で思い出深いことがあったら



2013.2 2012.2 2012.1 2010.6

教えてください。

堀内 (Borderless) 私が初めてコミュニティダンスに出会ったのが、この公演でした。2歳の娘と踊って、「それでも踊れるんだ」というインパクトが強かったです。

大澤 『踊りに行くぜ!!!』は、単なる成果発表というより、評価をされる場でもあります。コンペティションではないけれども、出るということは選別がされるし、お客さんの層も全然違う。そこに出ていくことは、これまでのワークショップとしての発表とはずいぶん違うと思うし、そこに向けた作品をつくるわけです。桑原さんのレポートにあったのですが、「プロのダンサーに混じっての、コミュニティダンス部として初のダンス作品発表は、ファシリテーターたちのモチベーションを上げる機会につながった。来場者に好評だった」と書いてあります。ファシリテーターを育成するというのがコミュニティダンス事業の長年のテーマだったのですが、ワークショップをやるファシリテーターのモチベーションを上げる機会がないと、ワークショップをやる専門家になってしまうくらいはある。それを『踊りに行くぜ!!!』みたいな場所に自分たちで求めに行ったという、そのモチベーションはすごいと思います。もう一つ、2010年度のシンポジウム『ダンスの持つ力』があります。こうやってシンポジウムとワークショップをやりながら、全国のネットワークを札幌にも引き寄せながらつくり続けてきた段階です。同時に福祉高齢者施設等でアウトリーチもやっていた。この辺りのことを覚えている方はいますか？

エレナ (Borderless) ちょうど地震の後に、宮城から来た人たちとワークショップをしました。皆で一つになって踊って、すぐ隣で手をつないだのが80代のおばあちゃんでした。私はそのおばあちゃんに私たちのエネルギーをあげてと思っていたのですが、反対でした。向こうから私たちにエネルギーをいただいた。すごく元気な生きる力をいただいて、すごい瞬間で、言葉に出ないくらいのエネルギーを手をつないだ瞬間に感じました。

大澤 それはエレナさんにとっても衝撃的な経験じゃないかと想



○ a / b / c / d / e / 2013年2月16、17日 ダンスシンポジウム「ダンスコミュニケーションの拡張」
○ e / f / g / h / i / 2012年1月15日 「踊りに行くぜ!!! II vol.2」教文コミュニティダンス部 発表公演

像するのですが、ダンスをやることの意味が変わったぐらいの衝撃ってなかったですか？

エレナ (Borderless) 一つひとつに意味があって、私の中ではそれぞれに変化がありました。ワークショップで詩を書いたのですが、命の大切さや喜びが伝わってきて、生きているだけですごく幸せだなんて思いました。

大澤 そのアウトリーチは、ヒロさんがやっていたのでしょうか？特に印象に残っている現場はありますか？

櫻井 どれも印象に残っています。エレナさんが話してくれた被災移住者の方へのアウトリーチは、「大変な思いをしてこちらに移住されてきたのだから、何かできることはないだろうか」という気持ちで行ったところ、むしろこちらに大きな力が返ってきた。そういう意味ですごく記憶に残っています。グループホームで認知症を患っている方と行ったワークショップでは、帰り際に「今日のダンスはどうでしたか？」と聞くと「私、今日ダンスなんかして

ないわよ」と返ってきて。それを聞いて「おおー」と思って次の週に行くのと、また「初めまして」から始まる。動きを覚えることは難しいし、「こんなやられてられるか」と怒って部屋に帰る人もいます。「こういった関係性の中で、この人たちが何が出来るんだろう？」と思いました。そんな中、僕が即興で踊ってみようとしたときに、あるおじいちゃんが立ち上がって身体を触れないコンタクト・インプロヴィゼーションみたいなダンスをしたことがあって。それは経験として強烈に残っています。高齢者の方とするダンスは、ものすごい強度があります。

大澤 砂連尾さんが高齢者の方とのダンスで学んだことは何ですか？

砂連尾 認知症の方と一緒に舞台上で踊ったことがあるのですが、全部が自分に照り返ってくるんです。「できない」「覚えられない」を基準にすることで、実は「できる」「覚えている」という価値観に縛られている自分に気付く。それらは社会で生きていく上で





○ a / b / c / d / e / 2012年2月18, 19日 ダンスシンポジウム「ダンスコミュニケーションの現在」
○ f / g / h / 2011年3月20日 ワークショップ&発表公演

○ i / j / k / 2011年 アウトリーチ活動の様子 ○ l / m / n / 2010年6月26日 ダンスシンポジウム+ファシリテーターワークショップ「ダンスの持つ力」
○ o / p / q / r / 2013~2010年 アウトリーチ活動の様子

ときには重要なことであるし、やっぱりずっと通じない会話だと時間が経っても何も物事が進まないということもあるんだけど、コミュニケーションできないことの豊かさとか…。僕が多分それを身体的に感じたのは、ダンサーとの仕事ではなく、むしろ障がい者や老人の方との経験を通してでした。義足の人と一緒に歩くことで、雲がゆっくり流れていることや木々の揺れに気づいたり、車椅子の人と視線を合わせることで「この目線から見える世界がこんなにあるんだな」と気づいたり。自分の身体に実感として、本当に全て返ってきました。

大澤 このときのレポートには「アウトリーチ事業を通じて、コミュニティダンス事業は大きく成長していけるんじゃないか」と書かれています。ワークショップや作品づくりとは別のコミュニティダンスとしての成長が、障がいを持っている方やお年寄り、避難されてきた人たちの出会いを通してもたらされるのではという気付きがあった。ただ、レポートに「質の高いアウトリーチを行うこ

とに課題を感じた」と書かれていることも正直だと思います。実際、この基準について何が正解なのか。それこそ途中で怒って帰るおじいちゃんがいると、それが失敗と受け止められることもある。でも、砂連尾さんのような気付きもあったりする。そこで言う「質の高さ」とは、一体何を指すのか。これは悩ましいところではあるのですが、コミュニティダンスから派生していくアウトリーチの活動によって新しい社会とのつながり方が起きていると思いますし、コミュニティダンス自体の成長の上でも非常に大きいチャンスとリスクがあるなと思いました。

堀内 (Borderless) 私は元バイト先の施設で今も継続してワークショップをしています。認知症の人たちとワークショップをしていると、全然話さない人やご飯を食べるときしか手を動かさないような人が、脈絡もなくいきなり踊り出すことがあって。職員さんがそれを見て驚いて、「その人の違う側面を見ることができた」と感動してくださった。最初の頃は健康のためにするダンスだと思

われていましたが、だんだんワークショップに対する職員さんの捉え方も変わってきて。普段ラジオ体操やタオル体操などレクリエーションとして身体を動かすことが正解という感じで行なっているものと、コミュニティダンスのワークショップは違うということが、伝わるようになってきたと思います。

参加者・観客の声

2010年6月26日
シンポジウム+ファシリテーターワークショップ
「ダンスの持つ力」

この先、誰かとダンスコミュニティを通して関わる際も、自分の手を通して相手に届ける、受け取るということにつながっていくきっかけの一つになると感じました。(参加者)

2013年2月16, 17日
ダンスシンポジウム
「ダンスコミュニケーションの拡張」

答えはさっぱりわからないことも多いですが、たっぷり考えるきっかけをもらったのが良い機会だったと思います。(参加者)



起点



2009.3

2009 →

リズ・ラーマン「Dance Life Festival 2008 in Sapporo」が 開催された「起源の年」

大澤 2009年には「コミュニティダンスグループ tane(タネ)」ができています。taneに関わった人はいますか？

参加者 taneはリズ・ラーマンのワークショップ後もコミュニティダンスを続けたいと思ったメンバーで立ち上げて、みんなで集まってダンスをして楽しむイベントを不定期に開催していました。そこから教文コミュニティダンス部につながっていった経緯があります。

大澤 taneから芽が出て、教文コミュニティダンス部へとつながっていったんですね。リズ・ラーマンの残したタネが、多様なものへと姿を変え、どんどん根を降ろしていったのだなと強く思いました。その起源となる2009年3月のリズ・ラーマン「Dance Life Festival 2008 in Sapporo」。この時の教文スタッフさんによる報告書の文章を紹介します。「リズの手法は、ダンスを使い、人と人を親密に交流させるものであった。何を言っても、どんな動きをしても、決して否定されることなく受け入れられ、その中からお辞でない、リズたちが真に素晴らしいと思うもの、美しいと感じるものを見つけて参加者に伝えるため、参加者はまず受け入れられることで安心し、心を開き、喜びを持ってクリエイティブなことに挑戦し、相手を認め合うようになっていったように思う」。この文章を読んだときに、教文は10年間これをやってきたのだなと思いました。もう一つ、なぜ「Dance Life Festival 2008 in Sapporo」をやるのかという動機について「ダンス事業を継続し広げていくために」と書いてあります。教文ではその前からダンス事業をやっていたのですが、公共ホールとしてコンテンポラリー・ダンスの事業をやるのは、なかなか厳しい。集客も厳しいし、理解者も増えないし、財団の中でもなかなか理解してもらえないという事情があったと思います。その中でダンス事業を継続し広げていくためには、「自分たち側だけからの働きかけではなく、他分野の協力者を増やしてシステム化することが必要と私たちは考えた。しかし、他分野の協力者を得るためには、まずコミュニティダンスが社会にとって必要であると感じてもらえる企画を実施し、伝えることが出発点と考えた」と。ダンス事業を継続し広げていくためということが、大前提としてあったわけです。コミュニティダンスをやるのが何のためか、もちろん社会にとって必要であるからやるわけですけれども、そこにスタッフの気持ちとしてこれからはダンス事業を継続していきたいという危機感があって始まった

というのは、こうやってダンスをやっている人たちの前で強く言った方がいんじゃないかなと思いました。

参加者 このときは「高齢者と踊る」というテーマでメンバーを募って、長い時間をかけて作品をつくりました。自分自身落ち込んでいた時期だったこともあり、ワークショップでは「受け入れられる」という体験が強く印象に残っています。「自分でいいんだ。自分を表現していいんだ。表現したことが受け入れられるんだ」ということがワークショップの中で繰り返されて、それが最後に舞台にのる。一緒に踊った仲間とのつながりをそのまま終わらせるのはもったいなくて、リズたちは帰ってしまうけれど、残った私たちが何かできることはないかとtaneを始めたんです。

櫻井 リズのカンパニーにはバリバリのダンサーもいますが、退職してからダンスを始めた人もいます。それが僕にとっては衝撃でした。あと、僕は高齢者とダンスをつくる経験も初めてで。当時77歳だった参加者の方は、ゲネプロで自分の出番が来ているのに楽屋でお茶を飲みながらモニターを見ていたり。そういう面白さも含めて、衝撃的で良い経験でした。

大澤 2009年までたどり着きました。ここから少し私に時間をください。山の頂上(2009年)から海(2018年)へ川を下ります。(スライドと映像が流れる)

大澤 さて「この人たちは一体何をやっているのか？」ということについて解説します。誰かを見る、誰かに見られる。誰かに触れる、誰かに触られる。支える、支えられる。みんなで踊る、みんなで踊る。これらの行為が螺旋状とならずと続くのがコミュニティダンスとも言える。普段の生活では、こんなに誰かを見る、誰かに見られるということはあまりないし、触られることはほとんどない。多分ワークショップの中でも、触る、触られるということは人によって不愉快かもしれないし、抵抗がある人もいるかもしれない。でも、触れる、触られるがないと、支える、支えられるができない。支える、支えられるは、物理的に身体を触って支えるだけでなく、気持ちの上でも支える、支えられる。いかに相手を信頼し、触れたり触れられたりするのかがということはずごく大事なことで、それがあって初めて支える、支えられるができる。その上で踊るといえることができる。コミュニティダンスでは、これが延々と繰り返されている。映像の中で、日高えりも地区の昆布の話



○ 2009年3月19日「リズ・ラーマン・ダンスエクステンジ」合同ダンス公演の様子

が出てきました。そこでは、「漁師が一番山の大切さを知っています。森があればそこに魚が着くよと教えられてきました。海を守るには、山を守らなければいけないんです」と語られます。私は、芸術と社会の関係を生態系のように見たいと思っています。生物における生態系の多様性と同じように、文化と芸術も多様に関わっていることが大事で、人と生きる芸術が社会にあることで、社会に人が生きていてはいないかと思う。社会をつくるためには芸術が必要で、そのために人と芸術をつなぐことを教文がダンスを通じて10年間やってきた。それが、コミュニティダンスと教育文化会館の10年だったと思います。

砂連尾 最後に一つ、今日感じたことを言いたいです。今、大澤さんが言ったみたいに、芸術と社会の関係を生態系として捉えたとき、まさに植林してくれたのが教文かもしれない。でも、この生態系って結構厳しい。今日、僕はやっぱり「ダンスを受け入れてくれている」という前提でのコミュニティダンスと感じたところがあります。全員が踊らなくてもいい場所があってもいいはずなのに、踊ることを良しと

し過ぎているのではないかと。踊りたくない人たちの「なぜ踊らないことが守られないんだろう」という思いをどう想像していくか。また、「受け入れる」というのはその人の悪いことも受け入れないといけないので、そこにどこまで触れているのかも思いました。千晶さんが僕のことを「ちょっと痛いところをほじくってくる」と言っていたのですが、嫌なところって愛すべきところでもありますから。それと同時に、多分自分の嫌なところもさらけ出していかなければならない。障がい者や老人などいろいろな人たちと出会っていると、きれいごとでは全然いきません。そこを次にみんなで考えていけるといいなと思います。**大澤** もっと複雑で、きれいごとだけでは、困難なことをどれだけ受け入れるか。自分の困難なことをどれだけさらけ出すか。それらをどこまで自分が引き受けられるのか、または引き受けられないのかということに、直面する現場でもあるのでしょね。確かにきれいごとだけではできないけれど、次の模索の10年間で、そのチャレンジがあってもいいのではないかなと私は思います。



タテじゃなく、ヨコで!

岩澤 孝子(北海道教育大学)
(2010~2013年参加)

教文コミュニティダンス部はアメリカのダンスカンパニー、Liz Lerman Dance Exchange(*)と札幌市民との出会いをきっかけに生まれました。残念ながら私はその現場に立ち会っていません。それでも、札幌での活動に関わっていると、創立者のリズ・ラーマンが日本のコミュニティダンス・ムーブメントに与えた影響力の大きさを感じずにはいられません。その力の源を確かめるため、アメリカへ行ってきました。

リズやその仲間たちへのインタビューを通じてわかったことは、彼らの活動がユニークなダンス哲学に支えられている、ということです。私たちはダンスの良し悪しを決める時、

ダンサーの技術力等を基準にその上下を判断する、つまり「タテに」見てしまうものです。しかし、一つの価値基準で判断することをやめて、形や動き方、アイデアなど多様なあり方を尊重する意味で、「ヨコに」、つまり平らかにダンスを眺め直すと、思わぬ面白さを発見することができます。「タテじゃなく、ヨコで!」。多くの人々がコミュニティダンスに魅了されたその秘密はこの発想の転換にあったのです。

(*)
Liz Lerman Dance Exchange: 1976年に創設されたアメリカのダンスカンパニー。2011年に創立者のリズ・ラーマンが引退してフリーランスになったため、Dance Exchangeと改称された。

Q3 どんなところが楽しいの?

A3

Q2でも触れた「作る過程で変化する面白さ」の他に、気軽に誰でも始められることも魅力のひとつです。コミュニティダンスに求められるのはダンスの技術でも経験でもありません。普段あまり出会うことのない色々な世代の人たちが集まり、参加者のアイデアが詰まったオリジナル作品を作れることも中々経験できない面白さだと思います。



Kyobun Community Dance Archives

教文コミュニティダンス
[2018年度]

検 証 と 評 価

事業評価者

大澤 寅雄

(株式会社ニッセイ基礎研究所 芸術文化プロジェクト室 主任研究員)

- 1 はじめに
- 2 定量的検証
- 3 定性的検証
- 4 検証結果のまとめ

検証と評価

大澤 寅雄 | 株式会社ニッセイ基礎研究所 芸術文化プロジェクト室 主任研究員

1 はじめに

1-1 なぜ検証し、評価するのか？

近年、行財政改革の必要性から、公共事業の説明責任への関心の高まりなどを背景として、文化政策や文化事業においても、政策評価や事業評価が定着してきた。同時に、評価の取組は政策や事業が絶えず改善を目指すためでもあり、その政策や事業が持つ独自の価値の理解、共感、支持を広げ、公共的な営みを持続可能にしていくためでもある。

文化政策や文化事業の評価には、その特性を踏まえた評価体系や指標が必要である。というのも、例えば入場者数や参加者数、収支バランスといった結果（アウトプット）の定量的な指標だけで評価するのではなく、所期の目的に沿った、短期、中期、長期にわたる成果（アウトカム）について、定性的な視点が欠かせないためである。しかしながら、他の施策領域との比較や事務事業評価の慣習から、文化芸術領域だけを定性的な視点で成果を示すことも困難となっている。そこで、定性的な視点を客観的に相対化し、比較が可能な指標を設定し、目的に照らした成果が得られたかどうかを検証することが重要となっている。

特に、今回の検証と評価の対象であるコミュニティダンスワークショップのように、舞台芸術活動の育成や支援を趣旨とする事業の検証・評価は、参加者数の多寡や収支バランスといった結果では目的の達成や目標の到達の度合いを測ることができないため、成果を丁寧に検証・評価し、今後の事業の改善と同時に、事業の価値と地域に果たす役割について、幅広い理解や支持を広げていく必要がある。

1-2 なにを検証し、評価するのか？

コミュニティダンスワークショップは札幌市教育文化会館（以下「教文」）の教育文化会館事業部の主催事業の一つである「舞台芸術活動の育成・支援事業」に位置付けられている。この「舞台芸術活動の育成・支援事業」は、「舞台芸術を体験することにより参加者に感動を与え、新たな出会いと創造の場となるワークショップや体験講座を、初心者から経験者、指導者など、さまざまな対象別に企画・実施」するものである。そこで本稿では、この事業の方向性に沿った成果が得られているのか、どのような

課題があるのかを検証し、評価する。

では何を検証し、評価すべきなのか。それは、活動を通じて「当事者（参加者）がどのように変化したか」を本稿では検証するものとした。具体的には、コミュニティダンスワークショップに参加する「事前」と「事後」の参加者の意識や意見を比較することで、企画の趣旨に沿って参加者の変化が表れたのかを検証し、評価する。

なお、教文の事業体系では「舞台芸術活動の育成・支援事業」以外にもワークショップや講座形式の企画があり、今後、事業全体の成果や課題を統合的に把握することや、個別の企画を相対化するため、今回のコミュニティダンスワークショップでの検証や評価の方法を、教文でのワークショップや講座形式の企画にも応用することを視野に含めて、評価指標と検証方法を検討した。

1-3 どのように検証し、評価するのか？

コミュニティダンスワークショップの検証と評価は、参加者を対象としたアンケート調査をもとに分析と考察を行った。アンケートは、①一連のワークショップの初回に配布・回収する「事前アンケート」、②各回のワークショップの終了後に配布・回収する「モニタリングシート」、③一連のワークショップの最終回に配布・回収する「事後アンケート」の3種類を用意した。3種のアンケートは、それぞれ個別の設問・選択肢を設定するが、「事前アンケート」と「事後アンケート」は共通の設問・選択肢を設定して参加者にどのような変化があったのかを比較し、「②モニタリングシート」は各回の参加者の回答の延べ数をベースにした集計から、定量的に成果や課題を測定した。

上記の定量的な成果や課題の把握と合わせて、④ワークショップの事後に、講師の櫻井ヒロ氏、河野千晶氏、砂連尾理氏の3名を対象にした「記述式アンケート」を行い、定性的な観点からも検証し、最終的な評価結果の集約を試みた。

2 定量的検証

2-1 基本情報

2018年度のコミュニティダンスワークショップは、以下の実施概要となっている。

企画名	コミュニティダンスワークショップ
講師	ファシリテーター：micelle（櫻井ヒロ、河野千晶） オブザーバー：砂連尾理
実施期間	I期 2018年9月13日～9月23日（全6回） II期 2019年2月20日～3月3日（全6回） ※II期の最終回はショーイングを兼ねて開催
会場	札幌市教育文化会館リハーサル室
参加者数	12人（I期のみ参加：2人、II期のみ参加：4人、全期を通じて参加：6人）

参加者12名の基本的な属性は、以下のとおりである（単位は「人」）。

性別	男性	女性	無回答	計			
	1	10	1	12			

年代	18歳未満	18～29歳	30歳代	50歳代	60歳以上	無回答	計
	1	3	1	1	4	2	12

在住地	中央区	北区	東区	南区	西区	その他	計
	2	2	2	1	3	1	12

以上が参加者の基本的な情報となっているが、事前アンケート、モニタリングシート、事後アンケートに関しては、検証を行う際にいくつか留意が必要となる。まず、ワークショップの初回には欠席し、その後のワークショップに参加した2人がいた。そのため事前アンケートは10人を母数としている。また、このワークショップではI期とII期でシリーズを分けて開催しているが、I期の終了時にはII期の参加が未定であったために事後アンケートにも回答したが、II期にも参加して再び事後アンケートに回答したため、事後アンケートに2度回答している方が4人いた。このI期とII期の重複回答に関しては、I期での事後アンケートの回答の4件を無効とし、II期の事後アンケートを有効として扱い、母数を12人とした。

2-2 事前アンケート

ワークショップのI期とII期のそれぞれの初回で配布・回収した事前アンケートの設問の内容は以下のとおりである。
回収数は先述のとおり10人となっている。

- Q1. 情報入手経路
- Q2. 参加の理由
- Q3. 今までの教文のワークショップや講座の参加回数
- Q4. 教文以外の舞台芸術に関わるワークショップや講座の参加経験
- Q5. ワークショップや講座への期待とその度合い
- Q6. ワークショップや講座の参加条件についての評価
- Q7~9. 基本情報(居住地、性別、年代)
- Q10. 教文の事業・運営へのご意見(自由記述)

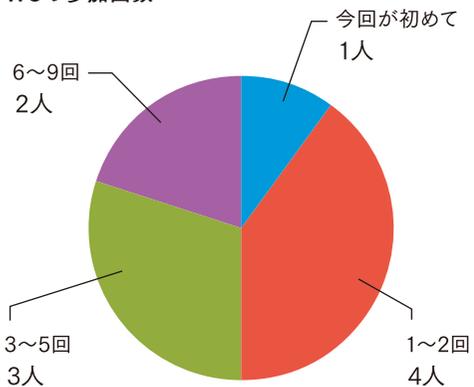
このうち、Q5とQ6については「2-5. 事前と事後の変化」で分析を後述し、Q7からQ9の基本情報は既述の参加者の属性を把握するもので、Q10については「3. 定性的検証」での分析に後述するため、ここではQ1からQ4の集計結果を説明する。

まず、「Q1. 情報入手経路(図表1)」は「郵送・メールなど劇場からのDM」が7人で最も多く、次いで「チラシ」と「教育文化会館ホームページ」が3人ずつとなっている。「Q2. 参加の理由(図表2)」は、「演劇やダンスや音楽などに興味があるから」が9人、次いで「表現力・創作力のスキルアップをしたいから」7人、「講師や講師の作品が好き

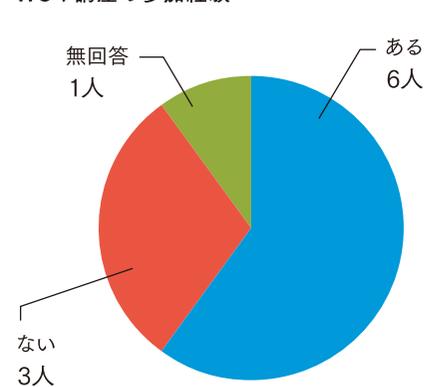
だから6人となっている。「Q3. 今までの今までの教文のワークショップや講座の参加回数(図表3)」は「1~2回」が4人、「3~5回」が3人、「6~9回」が2人となっており、「今回が初めて」は10人のうち1人となっている。「Q4. 教文以外の舞台芸術に関わるワークショップや講座の参加経験(図表4)」は「ある」が6人、「ない」が3人、無回答が1人となっている。

事前アンケートでの最も着目すべき点としては、今までの教文のワークショップや講座に参加した経験のある方は10人のうち9人で、初めての参加は1人だった点が挙げられる。

【図表1】
今までの教育文化会館の講座やWSの参加回数



【図表2】
教文以外の舞台芸術に関わるWSや講座の参加経験



2-3 モニタリングシート

モニタリングシートは、I期とII期を通じて8回のワークショップで、各回の終了時に配布、回収した。
モニタリングシートでの設問の内容は以下のとおりである。

- Q1. 本日のワークショップや講座についての感想
- Q2. 本日のあなたの状態
- Q3. 本日のワークショップの全体としての満足度
- Q4. 本日の感想や印象に残ったことなど(自由記述)

また、各回の回答数は以下のとおりで、全期を通じて総計50件の回答数となっている。
モニタリングシートによる分析は、この50件を母数として算出する。

I 期	9月13日	7
	9月15日	7
	9月17日	5
	9月21日	6
	9月23日	5
	計	30

II 期	2月20日	7
	2月24日	5
	2月27日	8
	計	20

全期	総計	50
----	----	----

Q4については「3. 定性的検証」での分析に後述するため、ここではQ1からQ3の集計結果を説明する。

「Q1. 本日のワークショップや講座についての感想は、「内容が楽しかった」「講師がよかった」「進め方がよかった」「参加メンバーの雰囲気や姿勢がよかった」という4項目を提示し、「そう思う」「どちらかといえばそう思う」「どちらかといえばそう思わない」「そう思わない」の4段階評価で聞いた(図表3)。その結果、「内容」「講師」「雰囲気や姿勢」の3項目は、「そう思う」という積極的・肯定的な評価が延べ50件のうち49件で、「どちらかといえばそう思う」という消極的・肯定的な評価で1件となっている。「進め方」に関しては、「そう思う」という積極的・肯定的な評価が47件で、「どちらかといえばそう思う」という消極的・肯定的な評価で3件となっている。4項目すべてで否定的な評価は延べ50件の回答で0件となっている。

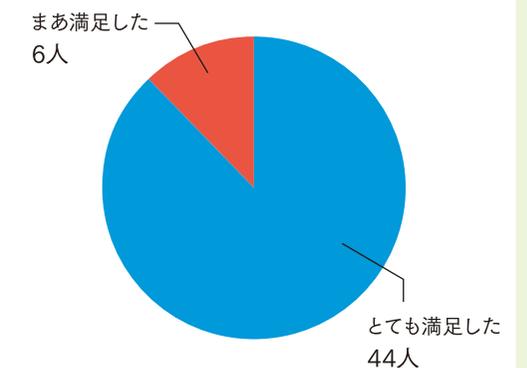
「Q2. 本日のあなたの状態」は「今日の体調は良い方だ」「今日の気分は良い方だ」「最近、自分にとって良いことがあった」「最近、自分にとって良くないことがあった」という4項目を提示し、Q1と同様に4段階評価で聞いた結果、「体調」「気分」「良いことがあった」は「そう思う」という積極的・肯定的な評価が多く、「良くないことがあった」に関しては「そう思わない」「どちらかといえばそう思わない」という否定的な評価が肯定的な評価を上回っている。

「Q3. 本日のワークショップの全体としての満足度」を「とても満足した」「まあ満足した」「少し不満足」「まったく不満足」の4段階評価

で聞いたところ、「とても満足した」という積極的・肯定的な評価が延べ50件のうち44件、「まあ満足した」という消極的・肯定的な評価で6件となっており、否定的な評価は0件となっている(図表4)。

モニタリングシートでの最も着目すべき点としては、全期を通じてワークショップの満足度は極めて高く、否定的な評価が皆無だった点が挙げられる。

【図表3】全体の満足度



2-4 事後アンケート

I期とII期のそれぞれの最終回で配布・回収した事後アンケートの設問の内容は以下のとおりである。
回収数は12人となっている。

Q1. ワークショップや講座の参加回数

Q2. 参加したことによる自身の変化

Q3. ワークショップや講座の参加条件についての評価

Q4. ワークショップや講座の総合的な満足度

Q5. 今までの教文のワークショップや講座の参加回数

Q6. 後の教文のワークショップや講座の参加意向

Q7. 今後の教文での公演鑑賞の意向

Q8~10. 基本情報(居住地、性別、年代)

Q11. ワークショップの感想、教文の事業へのご意見
(自由記述)

このうち、Q2とQ3については「2-5. 事前と事後の変化」で分析を後述し、Q8からQ10の基本情報は既述の参加者の属性を把握するため、Q11については「3. 定性的検証」での分析に後述するため、ここではそれら以外の設問の集計結果を説明する。

「Q1. ワークショップや講座の参加回数」は、I期とII期のそれぞれ6回実施したワークショップに対して平均の参加回数は5回となっている。全回出席がI期は4名、II期は3名となっており、欠席は少なく継続的に参加した方がほとんどとなっている。

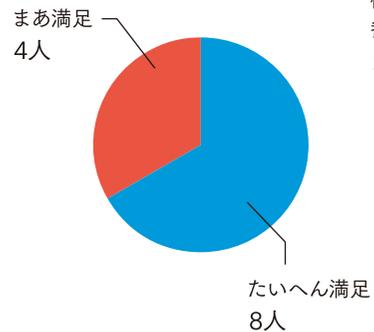
「Q4. ワークショップや講座の総合的な満足度」は「たいへん満足」「まあ満足」「少し不満足」「まったく不満足」の4段階評価で聞いたところ、「たいへん満足」という積極的・肯定的な評価が12人のうち8人、「まあ満足」という消極的・肯定的な評価が4人となっており、否定的な評価は0人となっている(図表5)。

「Q5. 今までの教文のワークショップや講座の参加回数」(単数

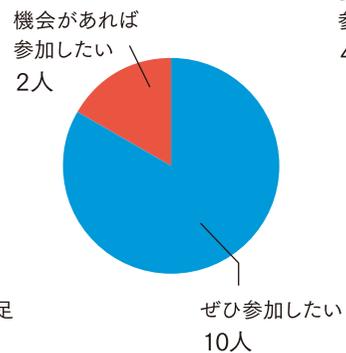
回答)は「3~5回」が5人、「1~2回」が3人、「6~9回」が2人、「今回が初めて」と「10回以上」がそれぞれ1人となっている。「Q6. 今後の教文のワークショップや講座の参加意向」(単数回答)は「ぜひ参加したい」という積極的・肯定的な意向が12人のうち10人、「機会があれば参加したい」が消極的・肯定的な意向が2人となっており、否定的な意向は0人となっている(図表10)。「Q7. 今後の教文での公演鑑賞の意向」は、「ぜひ鑑賞したい」という積極的・肯定的な意向が12人のうち8人、「機会があれば鑑賞したい」が消極的・肯定的な意向が4人となっており、これも否定的な意向は0人となっている(図表11)。

事後アンケートでの最も着目すべき点としては、ワークショップに高い出席率で継続的に参加しており、ワークショップの総合的な満足度も、今後のワークショップの参加意向や公演鑑賞の意向も極めて高く、否定的な評価が皆無だった点が挙げられる。

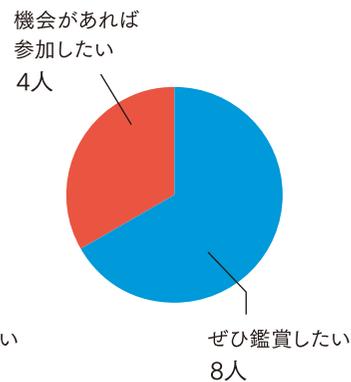
【図表4】
総合的な満足度



【図表5】
今後の教文のWSや講座の参加意向



【図表6】
今後の教文での公演鑑賞の意向



2-5 事前と事後の変化

事前アンケートと事後アンケートを通じて、ワークショップを経験したことによる変化を把握するための共通の指標を測る設問を設定した。既述のとおり、I期とII期の重複回答を除いた8人の参加者の回答を分析した。分析の指標は以下のとおりである。

①活動前の期待(事前)と活動後の実感(事後)

- A. 普段出会えない人に出会えて、刺激を受けたり人間関係に広がるが生まれたりすること
- B. 演劇やダンスや音楽などが以前より身近になって、楽しく鑑賞したり、表現することを楽しめるようになること
- C. 演劇やダンスや音楽等、もっと上手になって、人に喜ばれたり、観客に感動を与えられたりようになること
- D. 俳優、ダンサー、音楽家などをプロとして仕事できるようになることや、その能力を高めること
- E. 舞台芸術や文化施設と社会をつなぐ仕事に携われるようになることや、その能力を高めること
- F. 演劇やダンスや音楽などを、教育、福祉、まちづくりなどに応用して、地域の活性化に貢献すること
- G. 演劇やダンスの音楽などに深く触れ合うことで、自分自身の物事の見方や考え方などを見直すこと

②ワークショップや講座の参加条件についての事前と事後の評価

- A. 開催時期 B. 回数 C. 時間帯 D. 受講料金

①のAからGまでの7項目は、本プログラムの企画目的を含めて、教文でのワークショップ・講座形式での事業で掲げることが多い企画目的を想定した「求めるべき成果」を言語化した指標となっている。事前アンケートでは「あなたは今回のワークショップや講座に参加することで、どのようになることを期待していますか」という質問で、AからGの7項目を4段階評価で聞いている。その上で評価のウェイト(重み)を設定するため「とても期待する」を+(プラス)1.0、「まあ期待する」を+0.5、「あまり期待しない」を-(マイナス)0.5、「まったく期待しない」を-1.0とした。事後アンケートもAからGの7項目について「今回のワークショップや講座に参加したことで、あなたご自身はどのように変化したと思いますか」として、同様に「そう思う」を+1.0、「まあそう思う」を+0.5、「あまりそう思わない」を-0.5、「まったくそう思わない」を-1.0とウェイトを設定して、各項目別の評価

の合計値を算出した。

②は、事前アンケートと事後アンケートと同じ設問で、プログラムの参加条件や運営面での評価を把握するためにAからDの4項目の指標を設けた。「今回のワークショップや講座の参加条件について、あなたの意見をお聞かせください」という質問で、4項目について「たいへん満足」「まあ満足」「少し不満足」「まったく不満足」の4段階評価で聞き、同様のウェイトを設定して評価の合計値を算出した。

①と②の事前・事後のウェイトの設定により、仮に8人全員が「そう思う」または「たいへん満足」の場合、合計値は+8.0であり、8人全員が「まったくそう思わない」「まったく不満足」の場合、-8.0となる。つまり+8.0に近いほど全体として肯定的な評価であり、-8.0に近いほど全体として否定的な評価だと言える。

まず、①の「活動前の期待(事前)と活動後の実感(事後)」で、7項目のうち、事前の期待と事後の実感の両面で高いのは、「B. 演劇やダンスや音楽などが以前より身近になって、楽しく鑑賞したり、表現することを楽しめるようになること(事前+8.0→事後+6.0)」、「A. 普段出会えない人に出会えて、刺激を受けたり人間関係に広がりや生まれたりすること(事前+7.0→事後+6.5)」だった。なお、事前の期待は高いものの事後の実感が低かったのは「G. 演劇やダンスの音楽などに深く触れ合うことで、自分自身の物事の見方や考え方などを見直すこと(事前+8.0→事後+4.0)」だったが、いずれの項目で事前・事後を通じて積極的・肯定的な回答は多い。その他の項目については、事前の期待と事後の自身の変化も消極的で、肯定的な意見と否定的な意見に分かれている(図表8)。

次に、②の「ワークショップや講座の参加条件についての評価」では、4項目のうち「C. 時間帯」(事前+7.0→事後+7.5)、「D. 受講料金」(事前+6.0→事後+6.5)、「B. 回数(事前+5.5→事後+7.0)」は事前よりも事後の方が高い評価となっていた。「A. 開催時期」は、事前+7.0→事後+4.5と評価が低下した(図表8)。

事前と事後の変化での最も着目すべき点としては、演劇やダンスを身近に感じたこと、人間関係に広がりや生まれたことといった点が、このワークショップでの事前の期待と事後の実感として評価が高く、一定の成果が挙げられる。また参加条件については、時間帯、回数、受講料金といった点は事前と事後を通じて満足度が高かったものの、開催時期に関しては事前に比べて事後の評価が下がっていたことがわかった。

3 定性的検証

3-1 事前・事後のアンケートの自由記述

事前・事後のアンケートやモニタリングシートでは、主に定量的な検証を目的とし、参加者の定性的な観点での意見を収集するために、自由記述の設問も設けている。

事前アンケートの「Q10. 教文の事業・運営へのご意見」では「今期も温和でゆったりした方々の中でリラックスしつつ、コミュニティダンスができそうでワクワクしています」「また参加できてうれしく思っています。新しい出会いに感謝します」といった、過去に参加経験のある方からの再び参加できたことへの喜びや期待が窺える。

モニタリングシートでは、回答したワークショップの回を振り返って印象に残ったことや短い感想で、多くのコメントは「おもしろかった」「楽しかった」といった肯定的な言葉が多い。その中で「自分の伝えたいこと、相手の伝えたいこと、自分の受け取り方、相手の受け取り方、ちがうからこそ生まれるストーリーがおもしろいなと思いました」「目をつぶってモノに触れるまでが少し不安に感じました」「ダンスという枠の幅の広さや面白さを改めて感じることでできるWSでした」など、身体を通した表現やコミュニケーションについての新たな気づきを得られた様子が窺える。

事後アンケートの「Q11. ワークショップの感想、教文の事業へのご意見」では「楽しかった」といった肯定的な言葉が見られる一方で、「1、2回しか参加していない人がショーイングを行うこと、否定はしませんが、あまり好ましくないと思ってしまう」「ダンスを作成する前段階で、各人のテーマに対する表現したいイメージを出し合うと良かったと思います」といった、ワークショップの運営や進め方に対する意見も見られた。

3-2 講師による2018年度の成果と課題

今回の検証と評価では、参加者からのフィードバックを基本としているが、ワークショップの講師を務めた櫻井ヒロ氏と河野千晶氏や、これまで教文のコミュニティダンス事業に継続的に関わり、2018年度はオブザーバーとして参画した砂連尾理氏からもコメントを寄せていただき、検証の素材とした。

まず、2018年度のワークショップの成果については、「ワークショップを通じて参加者一人ひとりの様々な価値観を通じて共有する事ができた」（櫻井氏）ことや、「他人や自然と触れあうことで生活の中に新しい発見があったという参加者からの声がかかれた」（河野氏）と、多様な価値観への気づきや発見をワークショップの成果と捉えている。また最終回のショーイングにお

いて、札幌市内で活動する2団体と「お互いの作品を真剣に観あう参加者の姿が印象的でした」（櫻井氏）、「他の団体と作品を見せ合うことで、コミュニティダンスの多様性や可能性の幅を感じた」（河野氏）など、地域のダンサー間での交流に手応えを感じていることが見受けられる。

オブザーバーとしてショーイングを見た砂連尾氏からは、「特に櫻井さんの柔らかい雰囲気とその性格はダンス未経験者に対してもダンスを学ぶ、また学び合う上での場づくり・居場所をきちんと提供できている点は特にコミュニティダンスの現場において重要で、河野さんもそんな櫻井さんのダンスに対する姿勢をリスペクトし、ダンスのヒエラルキーを排して誰もが自由にダンスを学びあう環境作りは二人によって進められているように感じます」と、講師の姿勢を評価している。

一方、2018年度の課題としては、「ショーイングを開催するにあたっての会場や、照明、音響、広報その他様々な問題を解決し、より充実した環境を創造していくために今後、劇場とダンスアーティストとの更なる連携が求められている」（櫻井氏）、「参加日数に乗じて出演シーンを変えるなどの対策をとるほか、観客にみせる作品をつくるということの意識の共有を参加者としていくことが必要だ」（河野氏）といった、ショーイングに向かっての教文や参加者との共通認識やコミュニケーションの課題が挙がり、ワークショップでは「作品をまとめることにとられ気味になり、参加者の身体に向き合う熱量が足りなかった」（河野氏）がという意見が講師から挙がっている。

砂連尾氏は、講師の二人について、ダンサーあるいは作家として「現時点でも作品制作やそれに伴う社会活動に対してそれほど積極的にアプローチしているように感じられない点は少し残念なところ」と述べている。この指摘は、講師だけではなく教文に対しての意見でもあり、「作家としての絶対的エゴ、またそんな世界観を舞台上に出現させていく技術の未熟さに繋がっているように感じられます」（砂連尾氏）としている。

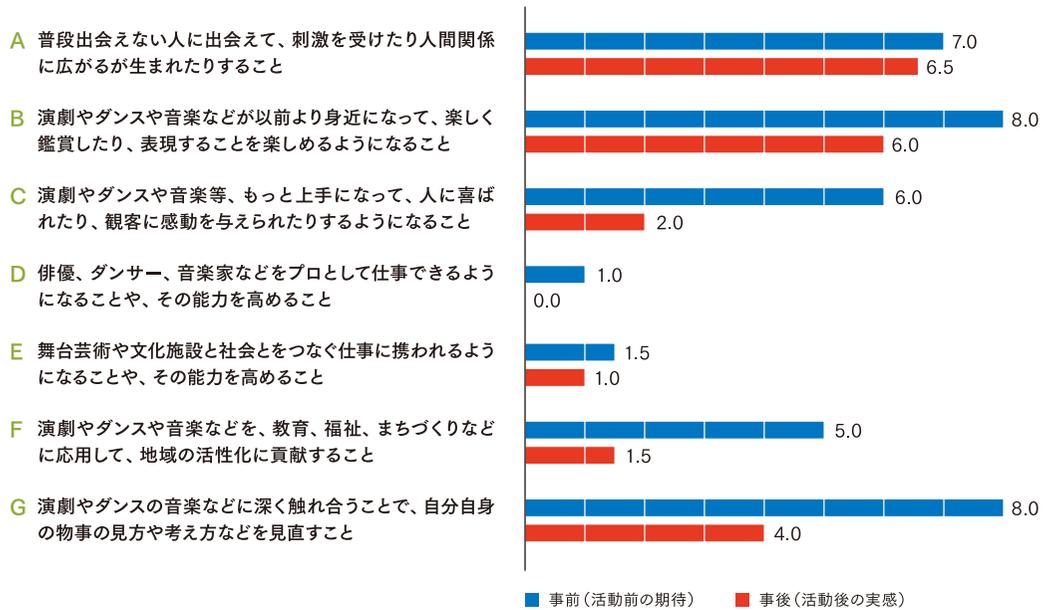
講師とオブザーバーから見た成果と課題に関しては、ワークショップへの取り組み方だけではなく、ショーイングに対する考え方や求める成果について、共通認識やコミュニケーションがより一層求められていることが浮かびあがっている。

3-3 これまでのコミュニティダンスの成果と課題

2009年から継続してきたコミュニティダンス事業の成果について、「毎年のワークショップ参加者の増加や公演の集客などからようやくコミュニティダンスが地域に浸透し始めてきたという実感を得ることが出来ました」（櫻井氏）、「ここ数年続けて参加

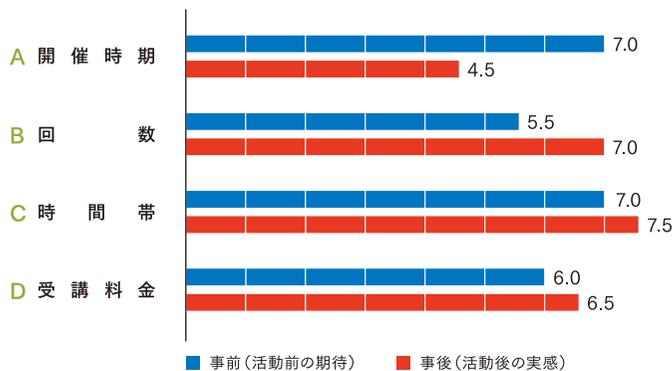
【図表7】

事前(活動前の期待)と事後(活動後の実感)の評価



【図表8】

ワークショップや講座の参加条件についての事前と事後の評価



している方たちが新しい方へのフォローを自然にしていたりという、受け身の姿勢だった方が積極性を持ち動いている場面がみられ、安心して自分を出せるコミュニティが形成されてきたと感じた」(河野氏)など、コミュニティダンスの地域への浸透や、ダンスを通じたコミュニティの形成が進んだ手応えを伝えている。また、オブザーバーの砂連尾氏は「櫻井さん、河野さんという二人のファシリテーターや彼らに続く若手の育成に加え彼らの周辺にいる新たなグループを発掘できている点は今後の展開を期待できる」と、今後につながっていく道筋が見えてきたようだ。

課題としては「新規参加者の募集が難しい。まず知ってもらうためにはどうしたらいいのか」(河野氏)、「今のメンバーと協力し、まだダンスを届けられていない世代、地域にアプローチしていくのが課題」(櫻井氏)という、参加者の固定化の問題や、より一層の世代的・地域的な裾野を拡げていく必要性を講師は感じている。砂連尾氏からは「事業担当者を三年くらいは据え置いて一貫したビジョンの下、事業を継続できる態勢を整えて頂けると、事業の検証がより確かなものになるのではないのでしょうか」と、教文としてのコミュニティダンス事業を支える継続的な体制の整備を期待している。

2009年度以来のコミュニティダンス事業は、一方では地域のダンスシーンにとっては浸透してきた面もありながら、まだ参加者の固定化や地域の一般市民への広がりには十分ではないことが現状となっている。

3-4 ダンスを通じた人やコミュニティの変化

最後に「ダンスを通じた人やコミュニティの変化」について質問したところ、「まずはダンスを通じて一期一会を楽しむように心がけています。その結果相手が心を開いてくれたり、お互いの関係性が深くなっていくような事があるととても嬉しい」(櫻井氏)、「ダンスを通して多様な感じ方や考え方に気づき、それが自分自身の可能性を再発見すること、そして何よりも人生を楽しんでいくことに繋がって行って欲しい」(砂連尾氏)、「身体を通して多様性を感じ、他人を受け入れられるようになると思う。また、そうすることで自分を受け入れてもらえる安心感を得て、自分をより大切にできるようになれば」(河野氏)と、人間の心と身体の開放や、他者や自己を受け入れて人間関係を深化させることの作用に触れている。

さらには「様々な年齢や身体を持った人と出会える場を設けることができる」(河野氏)、「この原始的ともいえるツールが、フォークダンスの輪を繋ぐ手のように人と人を繋ぐ役割を担えるのではないか」(櫻井氏)、「自由とは何か、また人が対等に幸せに生きていくこととは何かを考えさせてくれるような役割が

ダンスにはあるように思います」(砂連尾氏)と、生活に身近な観点から大局的な観点まで、コミュニティにとってダンスが果たす役割や可能性を実感していることが窺える。

4 検証結果のまとめ

以上の定量的な検証と定性的な検証を集約すると、以下のように要約することができる。

ダンスを通じたコミュニティの形成の一方で、新規参加者の減少の課題

事前アンケートと事後アンケートの両結果から、今までの教文のワークショップ(多くの場合はコミュニティダンス事業)に参加経験のあるリピーターの割合が高い。このことは、ダンスを通じたコミュニティが形成され、定着しているという中長期の継続事業による成果だと評価できると同時に、新規の参加者が少なく性別の偏りが大きいことや、より一層の世代間や地域間の広がり求められていることは、講師も課題として認識するところである。

極めて高いワークショップの満足度、講師と参加者との厚い信頼関係

モニタリングシートの結果から、全12回を通じたワークショップの満足度は極めて高く、否定的な評価が皆無だったことは特筆すべき評価である。事後アンケートの結果から、出席率も高く継続的な参加となっており、ダンス活動を単に楽しむだけでなく、ダンスを通じて身体を通じた表現やコミュニケーションについての新たな気づきを得ている。また、講師と参加者との厚い信頼関係や安心感が醸成されており、オブザーバーからも高い評価を受けている。

講師、参加者、教文のショーイングに対する意識、求める成果の認識のズレ

今回の検証では、ワークショップの成果を発表するショーイングについて掘り下げた設問・選択肢を設けていなかったものの、参加者の自由記述や講師のコメントの共通点として、ショーイングでワークショップの出席回数に差がある参加者のケアについて指摘があった。また、講師と教文スタッフとの間にも、ショーイングに対する意識や求める成果の認識のズレが課題として浮かび上がっている。

ダンスが身近になり、ダンスを通じて人間関係が広がり、物事の見方や考え方が変化

事前と事後のアンケートの比較により見えた成果としては、ダンスが以前よりも身近になったこと、人間関係に広がり生まれたこと、自分自身の物事の見方や考え方を見直すことといった指標で高く評価を受けている。講師やオブザーバーが、ダンスを通じて人やコミュニティに変化をもたらす役割や可能性を、参加者は身を持って体現していると同時に、教文の主催事業の体系として「舞台芸術活動の育成・支援事業」の目的に沿った成果が表れている。

今回の検証では、単年度の事業を対象にしているものの、2009年から10カ年にわたって継続してきたコミュニティダンス事業ならではの人的資源、ネットワーク、経験の蓄積がなければ得られない成果(アウトカム)が可視化されたものでもある。この成果を継承させていくためにも、今回の検証と評価を踏まえながら、改めて事業の目的や目標を再設定し、コミュニティダンスを通して「人と芸術と社会をつなぐ」という教文のミッションを追求していくことが、今後も求められている。



教文コミュニティダンス部

櫻井 ヒロ



北海道教育大学

岩澤 孝子

教文コミュニティダンス事業の、 次の10年を考える。

教文コミュニティダンス事業に最初期から参加しファシリテーターとして関わり続ける櫻井ヒロさんと、2013年度までファシリテーターとして関わり「コミュニティとアート」に関する研究を続ける岩澤孝子さん。二人が考え続けてきた「コミュニティダンス」と、この10年の成果と課題をふまえ、今後模索すべきことを探ります。

聞き手・構成：松田 仁央

—— これまで札幌市教育文化会館(以下、教文)では、過去のワークショップ参加者も交えての振り返り会やアンケート調査をもとにした事業分析などを行っており、ワークショップ参加者の満足度がとても高いこと、ダンスを通じたコミュニティが形成され定着していることなどが成果として挙げられています。一方で「新規参加者の少なさなどメンバーの固定化」「講師、参加者、教文のショーイングに対する意識のズレ」など課題も浮かび上がってきました。
岩澤 メンバーの固定化は課題として捉えられたんですね。
教文 新規の参加者をもっと増やしていこうという側面があったにも関わらず、メンバーが固定してしまったことは、一つの課題として言えるのではないかという評価はありました。
岩澤 それもよくわかりますが、「コミュニティ」ですから。メンバーの固定化が「問題」という文字で出てくると、どうなのかなという思いもあります。「コミュニティ」をどう捉えるかですね。

—— 課題については後半改めて伺っていこうと思います。岩澤さんは、コミュニティダンスに興味がある人やそのファシリテーターを目指す人を対象に教文で開催されたダンスシンポジウム「ダンスの持つ力」(2010年6月)に足を運んだことがきっかけで、教文コミュニティダンス部に関わるようになったと聞きました。
岩澤 私は民族音楽学を研究していて、タイの伝統的な舞踊や音楽を行う人たちと、その周りにいる人たちが形成するコミュニティに興味を持ってずっとやってきたのですが、21世紀に入ってそういった伝統的な枠組みのコミュニティやパフォーマンスといったものとは別の動きというか、ちょっと何か変わってきているように思っていて。コミュニティダンスは、ダンスそのものへの興味ももちろんですが、ダンスを巡ってどのようなコミュニティがつくられていくのかということに、研究者としてすごく興味がありました。さらに外側から研究者として観察するのではなく、ファシリテーター

の一人として関わったことで自分自身も変わっていったし、コミュニティがつくられていく過程を内側から体験することができたので、大変に面白かったです。

—— ファシリテーターとしての活動の中で、印象に残っていることはありますか？

岩澤 割と最初の頃のことですが、耳の聞こえない女性がワークショップに参加してくれたことがありました。その方と一緒に踊ったときに、言葉を交わさなくても身体が一つになる経験をさせてもらえた。それって、コミュニティダンスをやるときに口では結構言ってきたことだけど、実感としてそれを体験することができたのは、一つ面白いことだったなと思います。

櫻井 孝子さんといえば、野営ダンスじゃないですか？

岩澤 あ、そうですね。外に行ってダンスをする「野営ダンス」というイベントを2011年に立ち上げまして。自然の中でダンスすることによって、いつもと違う瞬間を経験できるだろうということから始めたプログラムで、初回は支笏湖で行いました。野営ダンスでは、できるだけ踊らないんです。スタジオでやると、ダンス経験者もいるせいか、ついみんな踊ってしまう。でも野営ダンスでは、まずとにかく遊ぶ。水をパシャパシャしているだけだけど、「あ、これはダンスだよ」って気づいてほしい。スタジオでその動きをやらうと思ったら振付になってしまうけど、自然があることによって意識せずに身体が動いてくる経験ができる。私はそれがダンスになると思って、野営ダンスをしていました。

—— 岩澤さんは2013年度まで教文コミュニティダンス部で活動されていましたが、ご自身が離れてからも、教文のコミュニティダンス事業の発表などを見る機会はありましたか？

岩澤 『The home dance ザ・ホーム・ダンス/ワーク・イン・プログレス』は見ました。構成・演出・振付をされた砂連尾さんは、やっぱりすごく経験を積まれていて、うまいなあ。参加者の中からいろいろな要素が出てきたときに、それをどうまとめるのかは結構難しいし、アーティスト主導になっていけなと思うんです。アーティストによる「味付け」ぐらいまではいいかもしれないけれど、「アーティストの作品」としてではなく「コミュニティダンスの作品」として観客の前に出さなければいけない。だけれどもアートとしての価値もなければいけないというジレンマがある中で、絶妙なバランスで、砂連尾さんらしさもありながら、コミュニティの特徴も出して作品として成立させているなと思いました。

櫻井 作品のことと言うと、ワークショップの最終的なゴールのあり方については今すごく考えています。砂連尾さんは作家で、僕も

作家になりたいから目指すところは「作品づくり」でいいのですが、コミュニティダンスのゴールがそれだけになってしまうのも嫌だなという思いがあって。必ずしもダンス作品じゃなくてもいいんだらうなって、最近を考えています。教文コミュニティダンス部が始まって最初の2年ぐらひは、ファシリテーター3人で順番にワークショップを担当していたのですが、しばらくしてから参加者もワークショップを30分受け持ってみるという感じに広げて、それが何だか良くて。参加者にはダンス作品をつくりたい人もいれば、生活の趣味として楽しみたいという人も。その中で作品づくりだけがコミュニティダンス・ワークショップのゴールになってしまうのは、どうなんだらう？

—— ショーイングは必要だと思いますか？

岩澤 プロジェクトのスパンによると思います。例えば1年間などの長いスパンで見たときには、目標を設定した方が、コミュニケーションが強く、深くなるということはあると思う。でも、私は別になくてもいいと思っています。なぜかと言うと、それまで築かれてきたコミュニティダンスのコミュニティの枠組みが、外に向けて発信するショーイングに向かうときに変わってしまうから。それまでコミュニティダンスの中で共有されていた何かを、その外にいるお客さんともつながるような何かに変えなくてはいけない。見に来るお客さんが楽しむか楽しめないかはお客さん次第かもしれないけれど、楽しんでもらえるだろうかという不安や期待が出てきてしまう。



○コミュニティダンス部

リズ・ラーマン ダンスエクステンジ合同ダンス公演後、リズ・ラーマンの気持ちを繋ぎたいと有志が集まったことで始まったコミュニティダンスグループ。幅広い世代、年齢の参加者が集まり、月に一度のダンスワークショップを開催した。札幌市内の高齢者施設や児童保育所へのアウトリーチも実施したほか、「踊りに行くぜ!!」II vol.2に参加するなど精力的な活動を行なった。

対談

教文 コミュニティダンスのコミュニティが、ショーイングに向かう意識が強くなることで変質するというのは、おっしゃる通りだなと思いました。コミュニティダンスは、さまざまな背景を持つ人たちが集まって、それぞれのパーソナルなところからダンスが生まれていくアプローチだと思います。それを「作品」として成立させるときに、パーソナルな部分を活かした作品づくりと、それをお客さんに楽しんでもらうことの間で苦しさみたいなものが生まれて、解釈も難しくなっているのかなと思いました。バレエやヒップホップダンスなどいわゆる一般認識上のダンスは、理想とする形がもう決まっているので、そこに向かって突き進んでいきますよね。だけどコミュニティダンスの場合は、それぞれの個性やその人の中にあるものが身体表現としてアウトプットされる。そういった中では、ショーイングに対する意識や認識のズレは当然起こります。「コミュニティダンスの良さは、コミュニティが形成されていくプロセスにある」というのは一つさうだと、でも何かしらの目標のもとショーイングをゴールとして設定する側面にも意味がある。そのどちらかを優先してしまうと、そこでまたズレが生じてしまうだろうなと思いました。

岩澤 ショーイングの概念を変えるというのも、ありだと思います。「コミュニティダンスというちょっとわけのわからないものをお客さんに見せる」という違和感の上に成り立っている前提を変えると、もしかしたらもっと楽しいものになるかもしれない。

—— コミュニティダンスのワークショップを見せる時間もショーイングだと思いますし、お客さんを集めて舞台上で作品を発表することだけがショーイングではないと思います。実際、2019年3月のショーイングでは3団体が発表しましたが、一つはその場にいた人たちに参加者になってもらってワークショップを行い、それを見せるというものでした。ただ、そのあとの振り返り会で出た「踊りたくない人が踊らずにいることのできる場所をどう確保するか」という意見にも共感します。自分はそういう場で参加はしたくない



けれど、見てはいたい。そういう人たちが「このダンスの場に参加していないのか」と問われると、私は参加していると思うんです。そのあり方を認めてほしいというか、現状だと踊らないことに居心地の悪さを感じてしまう。ワークショップの見学は、「踊ってみない？」と言われる危険性がなければ楽しいのですが…。

岩澤 コミュニティダンスへの参加の仕方は本当にさまざまで、基本的には好きなようにしていんですよ。参加の一つの形として、「見学する」という役割を持たせるとしたらどうでしょう？その代わりに、徹底して集中して見学する。

—— 見学という役割が与えられると、踊らないことに罪悪感を感じることにしに、その場にいることができますね。

櫻井 僕も舞台作品を見に行くと、演者から絡まれるのは嫌です。「頼むから止めてくれ」って思うんだけど、舞台上では自分がそれをする役割なんだよね（苦笑）。

岩澤 私も、ファシリテーターでみんなに笑顔を振りまいている割に、逆の立場になったらすごく嫌ですね（苦笑）。無理に取り込もうとすると、気持ち悪いのかな。

櫻井 それが善になってしまうと嫌だね。ワークショップに参加することが良いことだっていう風になっちゃうと、参加できない人はものすごく嫌な気持ちになるかも。

—— ダンスをつくる過程への関わり方が、もうちょっと多様化してもいいのでは。舞台発表を見るだけがダンスを見ることなのかと言われると違う気もしますし、そういう新しい場を開いていくことも、教文のあり方としていいかもしれません。話を交えますが、岩澤さんの研究テーマである「社会包摂とアート」という観点からコミュニティダンスを見たとき、大事な役割はあると思いますか？

岩澤 私が具体的に社会包摂とアートの関わりを研究しているのはタイの事例で、そこにはいろいろな問題を抱えている個人やコミュニティがあります。そういったコミュニティ、これはコミュニティダンスのような一時的なコミュニティではなく土地に根ざしたコミュニティという意味ですが、自分があるコミュニティをもっとよく知るといって観点から、アートを使って自分自身を前進させていく運動を行っているグループやネットワークがあって、青少年が中心となって活動しています。その土地の良いところを探して、伝統芸能や工芸、現代的なアートの形を使ってコミュニティの内外へ知らしめていくことによって、みんなの結びつきを強くしていく、最終的にはある種の問題を解決していくというコミュニティ・アートの運動があります。そこにはシリアスな問題を抱えている人たちがたくさんいて、それらをコミュニティとアートの力

で変えていこうという運動なのですが、結局何が大事かと言うと、生身のコミュニケーションです。「自分はダメだ」とか「この場所は面白くない」といった固定観念を、アートを使うことによって変えていく。コミュニティダンスに来ている人たちは、もしかしたらそこまでシリアスな問題を抱えているわけじゃないかもしれないけれど、だからといってコミュニティダンスが重要でないということではない。人と人とのコミュニケーションを身体でリアルに体験して、自分自身や相手との違いに気付いたりする一番重要な基礎の部分で、コミュニティダンスは実現できる要素を持っていると思う。みんながコミュニティダンスをできる状況が良い社会なのかどうかはわからないけれど、少なくとももう少し広がってほしいかなとは思っています。最終的にはコミュニティダンスという名前がなくてもいいくらい、みんながそういうコミュニケーションを取れたら、それでいいのかもしれないです。

—— 櫻井さんは今後やっていきたいことなどはありますか？

櫻井 コミュニティダンスをやっている他地域の団体と交流する機会が多くないので、そこをつなげて、つくり手や参加者同士の交流の場をつくってみたいです。あとは、バリバリ踊りたいダンサーがちょっとワークショップに参加しづらい感じになっているという課題もあります。コミュニティダンスの場では、バリバリ踊れることは、実はそんなに強度がない。日常生活で培ってきた動きにはそれだけ強度があって、それはダンサーにとっても豊かになるきっかけにつながると僕は思うのですが、それでもやっぱり難しさを感じてしまうダンサーがいることは事実で。ダンサーとそうではない人が、同じ舞台上で同列にパフォーマンスできる作品をつくることは、自分の課題ですね。あと先ほど「ショーイングの概念を変える」という話も出ましたが、コミュニティダンスのゴールが「舞台上で踊る」ばかりになってしまうと、なんかちょっと寂しくなってしまう。なぜなら、コミュニティダンスはすごくパーソナルなダンスだから。ヒップホップやバレエも、元々はパーソナルだったものを普遍的なものにつくり上げていったもので、バレエの起源も民衆のパーティーみたいな感じだったらいいです。それをルイ14世が宮廷舞踊に仕立て上げたという歴史があるから、コミュニティダンスもやろうと思えばそういう風になり得るのだけど、多分そうじゃないだろうな



とっていて。コミュニティダンスの歩むべき道というか、僕がやりたいダンスはそういうものとはちょっと違う。お客さんからしても、他のダンスとコミュニティダンスを同じ視点で見ると、コミュニティダンスの持つ豊かさやうまく伝わらない問題もあると思っています。他のダンスとコミュニティダンスがうまく共存できる方法って何だろうかと考えています。これらのことを、ショーイングの形を含めて考えていきたいです。

教文 例えばバレエはプロフェッショナルな表現に価値を置く芸術としてあって、それを求める一定の観客がいる。元々英国において国の保護がバレエに集中していた時代に、バレエと比べて観客の少なかったコンテンポラリーダンスのカンパニーが、集客のための活動の一つとして教育や福祉、医療の現場に出向いてアウトリーチ活動をたくさんしたことで、次第にそれらの価値が認められ、コミュニティダンスとして定着したという歴史があるそうです。この歴史をふまえると、コミュニティダンスの価値を認識してくれる人たちは、もしかしたら従来のダンスの観客とは別のところにいるのではないのでしょうか。英国で教育や福祉、医療の現場でダンスを見たこともない人たちがダンスに触れて、その価値を見出していったように、コミュニティダンスのショーイングやワークショップをもっと開けた出入り自由な空間でやることで、ダンスに全く興味のない人たちが「よくわからないけど何をやっているのかな？」という気持ちで見られる側面があるのかなと思いました。もちろん、そういう効果は他のダンスでもあるのかもしれないけれど、社会活動への流用のしやすさという点では、コミュニティダンスが優っていると思います。いろいろな属性の人たちの目に触れることで、コミュニティダンスの価値がさまざまな視点から見出されていく状況をつくるとしたら、それはいわゆるダンス公演以外の形なのかもしれない。ダンスに全く興味のない人たちに触れてもらえるような仕組みを考えることも、コミュニティダンスが認知されていく一つのきっかけになると思いました。



櫻井 ヒロ（さくらい ひろ）

コンタクト・インプロビゼーションユニットmicelle主宰。2008年に教育文化会館で開催されたリズ・ラーマンダンスワークショップをきっかけに、「教文コミュニティダンス部」の立ち上げに関わり、作品制作や高齢者グループホーム等でのダンスワークショップ等を精力的に行っている。



岩澤 孝子（いわさわ たかこ）

北海道教育大学 准教授（学術博士）。アジアの伝統芸能、現代パフォーマンス、コミュニティアートの研究に従事する傍ら、タイ舞踊家、コミュニティダンス・ファシリテーターとしても活動している。

あ と が き

2009年に始まり、2018年度で10年を迎えた札幌市教育文化会館のダンスワークショップ。その10年間は、ファシリテーターと参加者、そして当館職員が、まだ見ぬダンスに向かって試行錯誤し、コミュニケーションを継続してきた時間の積み重ねでもあります。

ダンスを踊ることで、当たり前は無意識にこなしていた日常生活を見つめ直し、参加者同士が信頼し合い、そこから生まれてきたダンスならではの身体表現が外に向かって開花する。ダンスワークショップには、とても感動する場面が数えきれないほどありました。そして、参加者の中には、ダンスによって自分の周りの世界が変わっていく体験をした方もいました。ダンスを踊ることで、また、創作されたダンスを外へ開くことで、世界にあふれている喜びや楽しさを、より多くの人々に伝えることができるかと強く感じています。

これからも、ダンスを通じてまだ出会っていない人々が出会うこと、まだ見ぬ自分に出会うこと、そしてまだ見ぬダンスが生まれる瞬間に立ち会うことを夢見て、教文のダンスワークショップ事業を継続していきたいと考えています。

札幌市教育文化会館

C R E D I T

[札幌市教育文化会館 コミュニティダンス事業アーカイブ]

○協力

櫻井ヒロ（ダンサー、振付家）

河野千晶（ダンサー、振付家）

砂連尾理（ダンサー、振付家）

○10年の軌跡を振り返る会・司会／検証と評価

大澤寅雄

（株式会社ニッセイ基礎研究所 芸術文化プロジェクト室 主任研究員／文化生態観察）

○企画協力

萩原麗子（京都芸術センター プログラムディレクター）

○コラム執筆・対談

岩澤孝子（北海道教育大学）

発行日

2020年3月31日

編集・発行

札幌市教育文化会館（公益財団法人 札幌市芸術文化財団）

〒060-0001 札幌市中央区北1条西13丁目

TEL 011-271-5822

www.kyobun.org/

編集協力

松田仁央

印刷

札幌大同印刷株式会社

Kyobun
Community
Dance
Archives

KYOBUN COMMUNITY DANCE
ARCHIVES 2009-2019

SAPPORO EDUCATION AND CULTURE HALL